

兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書

— 神戸市兵庫区西仲町における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2008

神戸市教育委員会

正誤表

	誤	正
例言 1.	西仲町 445	西仲町 12-19
19 ページ 14 行目	坑	坑
27 ページ 11 行目	開元通寶（初鑄 966 年）	開元通寶（初鑄 621 年）
〃 16 行目	157 は南唐錢	154、155 は唐錢
37 ページ 6 行目	明治 16 年（1884）	明治 14 年（1811）
報告書抄録 所在地	西仲町 445	西仲町 12-19
報告書抄録 蓋跡番号	24	04 - 24



1区第3遺構面全景（北西から）

卷頭写真図版 2



SD101出土遺物

兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書

— 神戸市兵庫区西仲町における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2008

神戸市教育委員会

序

海上交通の要衝として、物資や文化の往来の窓口である神戸港とともに発展してきた神戸市は、今年開港140周年を迎えました。

兵庫津遺跡は、兵庫区の湾岸部一帯に広く所在する遺跡です。兵庫津は古くは大輪田泊と呼ばれて、瀬戸内海航路の重要港として栄え、また、対外貿易の国際港としての側面を持ち、「みなと神戸」の原点ともいえる歴史を有しています。

今回の発掘調査は、民間マンション建設に伴うもので、調査の結果、兵庫津の歴史の一端を垣間見る資料が確認されました。本書が地域の歴史研究、あるいは文化財の保護、普及啓発の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にご協力いただきました、事業主である生和ホームズ株式会社をはじめ、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

神戸市教育委員会

例　　言

- 本書は、神戸市兵庫区西仲町445で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
- 現地における調査は、平成18年8月28日から平成18年11月28日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課 阿部 功が担当した。遺構図の作成は、株式会社アコードに委託した。一部の遺構図・調査区土層断面図の作成、ならびに地上写真撮影は阿部が行なった。
- 遺物整理作業は、平成19年度に神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、文化財課 黒田恭正、阿部が担当した。遺物写真的撮影については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 牛鶴 茂氏の指導の下、西大寺フォト 杉本和樹氏が行なった。金属製品の実測、清古作業は藤井珠美が行なった。
- 本書に掲載した位置図は、神戸市発行の2,500分の1地形図「神戸駅」、「兵庫」、「高松・刈藻沖」を使用した。
- 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系第V系(世界測地系)で、標高は東京湾中等潮位(T.P.)で示した。
- 本書の執筆は、「第3章」を丸山真史氏(京都大学大学院)、松井 章氏(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)より、玉稿を賜った。「第2章第8節」は、文化財課 中村人介の助言の下、阿部が執筆した。これ以外は阿部が担当し、編集を行なった。出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
- 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、事業主である生和ホームズ株式会社に多大なるご協力をいただいた。記して感謝を申し上げます。
- 現地での調査、本書の作成については下記の方々にご教示を頂いた。記して深謝を申し上げます。
赤松利佳　高久智広　間屋真一　橋詰清孝　藤本史子(五十音順敬称略)

目　　次

序

例　　言

目　　次

第1章　はじめ	1
第1節　兵庫津遺跡の立地と歴史的環境	1
(1)　遺跡の立地	1
(2)　兵庫津遺跡について	2
第2節　調査に至る経緯と経過	3
(1)　調査に至る経緯	3
(2)　調査組織	3
(3)　調査の経過	3
第2章　調査の成果	5
第1節　基本層序	5
第2節　第6・7遺構面の遺構と遺物	6
第3節　第5遺構面の遺構と遺物	11
第4節　第4遺構面の遺構と遺物	14
第5節　第3遺構面の遺構と遺物	16
第6節　第2遺構面の遺構と遺物	19
第7節　第1遺構面の遺構と遺物	22
第8節　金属製品	27
第3章　兵庫津遺跡から出土した動物遺存体	31
第4章　まとめ	35
第1節　兵庫津遺跡第42次調査地の変遷	35
第2節　元禄期の兵庫津復元と第42次調査地	37
第3節　おわりに	40

攝 図 目 次

fig. 1	兵庫津遺跡の位置	1	fig. 21	SB301・303出土遺物	18
fig. 2	兵庫津遺跡調査地点 (S = 1: 5,000)	4	fig. 22	焼土層出土遺物	18
fig. 3	調査風景 (写真)	5	fig. 23	第2遺構面平面図	19
fig. 4	調査区割図	5	fig. 24	SK201平面・断面図	20
fig. 5	基本上層図 (1区)	5	fig. 25	SK201出土遺物	20
fig. 6	第6・7遺構面平面図	6	fig. 26	SK202出土遺物	21
fig. 7	第6・7遺構面出土遺物	7	fig. 27	SK203出土遺物	21
fig. 8	SX708出土遺物	8	fig. 28	SK207平面・断面図・出土遺物	21
fig. 9	SX602平面・断面図	9	fig. 29	第1遺構面平面図	22
fig. 10	SX602出土遺物	10	fig. 30	SD101平面・立面・断面図	23
fig. 11	遺構に伴わない遺物	10	fig. 31	SD101出土遺物 (1)	24
fig. 12	第5遺構面平面図	11	fig. 32	SD101出土遺物 (2)	25
fig. 13	1区第5遺構面平面図	12	fig. 33	第1遺構面遺構出土遺物	26
fig. 14	SB503・504出土遺物	13	fig. 34	鉄製品	28
fig. 15	SX501平面・断面図・出土遺物	13	fig. 35	鉄製品X線透過像 (写真)	28
fig. 16	遺構に伴わない遺物	13	fig. 36	銅製品	29
fig. 17	1区第4遺構面平面図	14	fig. 37	銅製品X線透過像 (写真)	30
fig. 18	第4遺構面出土遺物	15	fig. 38	第42次調査地の変遷	36
fig. 19	第3遺構面平面図	16	fig. 39	元禄期兵庫津復元図 (S = 1: 10,000)	38
fig. 20	1区第3遺構面平面図	17	fig. 40	調査地周辺復元図 (S = 1: 2,500)	39

表 目 次

表1	種名表	33	表2	動物遺存体一覧表	34
----	-----	----	----	----------	----

卷頭写真目次

卷頭写真図版1 1区第3遺構面全景 (北西から)

卷頭写真図版2 SD101出土遺物

写真図版目次

図版1	1区第6・7遺構面空中写真 (東から)	国版10	SX708出土鬼瓦
	1区第6・7遺構面全景 (西から)		SX602出土遺物
	2区第6・7遺構面全景 (東から)		第6・7遺構面出土遺物 (3)
図版2	SK710 (北東から)	国版11	SB503・504出土遺物
	SX602石組 (南東から)	国版12	SX501出土遺物
	3区第6・7遺構面全景 (南から)		遺構に伴わない遺物
	SX708鬼瓦出土状況 (東から)		SB401出土遺物
図版3	3区第5遺構面空中写真 (南西から)		SX401出土遺物
	1区第5遺構面全景 (西から)	国版13	SB301・303出土遺物
	3区第5遺構面全景 (南から)		焼土層出土遺物
図版4	SX501 (北から)		SK201出土遺物
	1区第4遺構面全景 (西から)	国版14	SK201・202出土遺物
	1・2区第3遺構面空中写真 (東から)		SK203出土遺物
	3区第3遺構面空中写真 (南西から)		SK207出土遺物
図版5	1区第3遺構面全景 (南西から)	国版15	SD101出土遺物 (1)
	2区第3遺構面全景 (東から)	国版16	SD101出土遺物 (2)
	3区第3遺構面全景 (南から)	国版17	SD101出土遺物 (3)
図版6	1区第2遺構面全景 (南西から)		第1遺構面出土遺物
	2区第2遺構面全景 (東から)	国版18	土製品
	SK201 (西から)		漁具
図版7	1・2区第1遺構面空中写真 (東から)	国版19	石製品
	2区第1遺構面全景 (東から)		鉄製品
	SD101西側石積 (東から)		銅鏡
図版8	第6・7遺構面出土遺物 (1)		銅製品
図版9	第6・7遺構面出土遺物 (2)	国版20	出土動物遺存体

第1章 はじめに

第1節 兵庫津遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区南部のJR兵庫駅からJR和田岬駅付近一帯に広範囲に拡がる、兵庫の港と港町を中心とする奈良時代から近世にかけての遺跡である。昭和60年度（1985）の第1次調査実施以来、これまでに40次を超える調査が行なわれている。

兵庫津遺跡の立地する兵庫区南部は東西にJR山陽本線、阪神高速道路3号神戸線、国道2号線などの交通の大動脈が通過し、古くから市街地化が進んだため、現状での旧地形の観察は困難であるが、明治18・19年（1885・1886）測量「仮製地形図」などに失われた旧地形をみることができる。兵庫津遺跡は、風化のすんだ花崗岩により崩落しやすい六甲山地から流出した土砂と海流により、大阪湾岸に発達した和田岬と湊岬の二つの砂嘴に挟まれた湾の臨海部に位置する。六甲山地から湊岬へと注いでいた湊川は明治34年（1901）の流路付替工事により、兵庫区東山町付近から新湊川として西へ向かい、長田区内で苅藻川と合流して、和田岬西方で大阪湾へ流入する流路へ変更された。湾の沿岸部には浜堤が形成され、近世の絵図「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」（元禄9年〔1696〕）には南の和田岬側から「須佐之入江」が潟湖状に入り込む状況が描かれている。兵庫津遺跡はこの浜堤上を中心に立地する。

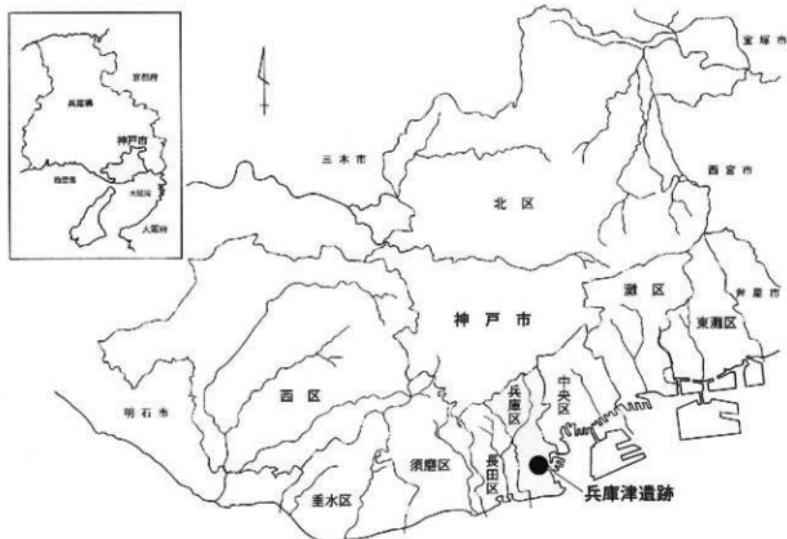


fig.1 兵庫津遺跡の位置

(2) 兵庫津遺跡について

兵庫津は古くは「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港のひとつとして発展してきた。文献上の記録では平安時代後期の文献である『行基年譜』（安元元年 [1175] 成立）に天平13年（741）の記事として「大輪田船息」の記載が知られている。平成13年度に芦原通で実施された第32次調査では、はじめて奈良時代の遺構、遺物が検出され、¹⁾兵庫津遺跡が奈良時代まで遡る事が確認された。

大輪田は平清盛による大修築を経て日宋貿易の窓口として繁栄する。この時期の兵庫津遺跡については不明な部分が多く、わずかに遺物の出土が確認されているに過ぎない。

中世には大輪山は兵庫（兵庫島）と呼ばれるようになり、鎌倉時代後期の延慶元年（1308）に東大寺へ兵庫関が寄進されて以降、東大寺、興福寺等の有力寺院等による権利争いの頻発が文献上に現れ、暦応元年（1338）興福寺へ室町幕府より「兵庫島商船日錢」の徵収権が与えられ、南北2つの関（東大寺の北関、興福寺の南関）が成立した。室町時代には足利義満による日明貿易の発着地となる。文安2年（1445）作成の『兵庫北関入船納帳』には現存するほぼ1年間の入港船舶数、船積地、積荷数等が記され、入港船の船籍は瀬戸内海沿岸を中心に四国・九州にまで及び、2,000隻近くの入港から兵庫は当時世界でも有数の港であり、交通の要衝としての地位が窺われる。しかし、応仁・文明の乱（1467～1477年）により衰退、国際港としての地位は埠に譲ることとなる。

14～16世紀にかけての兵庫津遺跡における遺構、遺物の出土は、平成8～10年度の兵庫県教育委員会による国道2号線共同構整備事業に伴う調査（第11～13次）、平成10年度第14次（旧第15次）、²⁾同11年度第20次、³⁾同13年度第24次、⁴⁾同14年度第31次、⁵⁾同17年度第39次などの各調査地点で遺構、遺物が確認されているものの、その全容は明らかではない。この内、第14次（旧第15次）調査では15世紀後半～16世紀前半の焼土面、礎石建物、石敷建物、埋壺遺構等が検出されている。

近世に入り、安土桃山時代には織田信長による花隈城攻めに戦功のあった池田恒興・輝政父子により、兵庫の町の中心に兵庫城が築かれ、町の周囲に「都賀之堤」を築き、城塞化される。江戸時代に入ると西国街道は兵庫へと迂回するようになり、江戸幕府の宿駅指定を受ける。近世の兵庫津については尼崎藩領期の元禄9年（1696）に作成された『攝州八部郡福原庄兵庫津絵図』等により、町並みの様子が知られていたが、真光寺境内を巡る濠の北東角、水路、道路を検出した平成13年度第26次調査、平成14年度の柳原惣門の調査（第29次）、平成16年度の兵庫陣屋及び勤番所関連遺構の検出（第35次）などによって、絵図の正確さが立証された。また、兵庫津は宝永5年（1708）の大火により、大きな被害を受けたことが、記録により知られていたが、平成10年度第14次、平成11年度第17・20・21次、⁶⁾平成13年度第24次調査等でこの大火に伴うものと推定される火災層が検出され、火災により焼失した町屋群の検出等から、町割や町屋の様子等も次第に明らかになってきている。また近年考古学、文献史、絵図研究、歴史地理学等各方面の成果から総合的な兵庫津の研究が進展しつつある。

兵庫は幕末に、兵庫（神戸）開港が行なわれ、明治時代に入ると兵庫城跡（尼崎藩領期は兵庫陣屋、明和6年〔1769〕上知後、兵庫勤番所）に初代の兵庫県庁が置かれた。

第2節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査対象地は、神戸市埋蔵文化財分布図に記載されている兵庫津遺跡の範囲内に所在する。共同住宅建設計画に伴い試掘調査を行なった結果、埋蔵文化財の存在が確認された。この結果を受けて、事業主である株式会社生和ホームズと協議を行ない、建設工事により、埋蔵文化財が影響を受ける範囲(約445m²)について発掘調査を実施した。

(2) 調査組織

平成18~19年度

神戸市文化財保護審議会	史跡・考古資料担当
榎上 重光	前神戸女子短期大学教授(～平成19年7月14日)
工業 普通	大阪府立狭山池博物館長
和田 端吾	立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	小川 雄三
社会教育部長	大谷 幸正(平成18年度)・黒住 章久(平成19年度)
教育委員会参事	柏木 一孝
(文化財課長事務取扱)	
社会教育部主幹	丸山 潔
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	
社会教育部主幹	渡辺 伸行
(埋蔵文化財センター所長事務取扱)	
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明(平成18年度)・千種 浩(平成19年度)
文化財課主査	丹治 康明(平成19年度)
同	安田 滋
同	山本 雅和
事務担当学芸員	前田 佳久(平成18年度)
	阿部 敬生
	中谷 正(平成19年度)
調査担当学芸員	阿部 功
保存科学担当学芸員	小村 大介
遺物整理担当学芸員	黒田 基正(平成19年度)

(3) 調査の経過

調査は残土箇場の確保の関係上、東西2分割の反転調査を行なった。

平成18年8月28日より、西半部(1・2区)の重機掘削を開始する。2区では石組の溝、土坑を検出。9月7日に第1遺構面の空中写真撮影実施、9月25日に第2遺構面の全景写真撮影後下層へ掘下げ。1区では焼土下層から町屋を検出。10月11日に空中写真撮影を実施し、12日より掘下げ、第4遺構面は1区のみで検出。10月16日に全景写真撮

影を行ない、17日より掘下げ、1区ではさらにもう1層の火災層を検出、その下層で第5遺構面を検出した。町屋を検出。2区は第3遺構面と同一であることを確認した。1区全景写真撮影。18日より下層へ掘下げ、多数の遺構を検出。工事掘削影響深度の関係上、杭設置部分など一部を除き検出のみでの調査完了となる。21日に空中写真撮影を実施。10月23日から反転作業開始。1区東壁土層断面実測。1・2区埋戻し完了。10月24日東半部(3区)重機掘削開始。搅乱が著しく、第1・2遺構面は消滅していることが判明。第3遺構面は大きく搅乱の影響を受けているが、東側で焼土下層から町屋を検出。11月1日全景写真、2日空中写真撮影実施後、下層へ掘下げ開始。6日第5遺構面から墨書き土器の埋納遺構、東側で町屋検出。14日空中写真撮影実施。下層へ掘下げ開始、多数の落ち込み、土坑、多量の瓦を検出。西半部と同じく杭設置部分以外は検出のみで完了。22日空中写真撮影実施。杭部分掘削。瓦取り上げ、鬼瓦が出土。24日から埋戻し作業開始。27日事務所片付け、28日調査機材搬出、現地における調査を完了した。

註

- 1) 桥詰清孝「兵庫津遺跡 第32次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2006
- 2) 国崎正雄・岡田章一・深江英彦「兵庫津遺跡Ⅰ」兵庫県教育委員会 2002
岡田章一・菱田淳子・深江英彦編「兵庫津遺跡Ⅱ」兵庫県教育委員会 2004
- 3) 内藤俊哉「兵庫津遺跡 第15次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- 4) 黒川恭正「兵庫津遺跡 第20次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- 5) 東喜代秀・中居さやか「兵庫津遺跡 第24次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004
- 6) 阿部 功「兵庫津遺跡 第31次調査」『平成14次神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
- 7) 平成17年度、神戸市教育委員会調査
- 8) 阿部敬生・阿部 功「兵庫津遺跡 第26次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004
- 9) 須藤 宏「兵庫津遺跡 第29次調査」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
- 10) 内藤俊哉「兵庫津遺跡 第35次発掘調査概要」神戸市教育委員会 2006
- 11) 内藤俊哉「兵庫津遺跡 第17次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
谷 正俊「兵庫津遺跡 第21次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002



fig. 2 兵庫津遺跡調査地点 (S=1:5,000)

第2章 調査の成果

第1節 基本層序

調査区の基本層序は、後世の搅乱の影響を大きく受けているが、部分的には良好に層序を確認することができた。(fig. 5) 盛土の下に、昭和20年(1945)の神戸空襲に伴うものと考えられる焼土層が存在し、数枚の近代整地層下で第1遺構面を検出している。この下層には数枚の整地層が存在し、その下には焼土層が存在する。この焼土層上面で第2遺構面を検出している。1区では焼土層上面の一部に土間状の貼土が行われている。第3遺構面は焼土層下で検出しているが、1区、3区東半では遺構面がよく焼けた状況で検出された。2・3区西半には焼土層の抜がりはわずかである。第4遺構面は1区のみで検出している。1区の第4遺構面の下層は整地層(明オリーブ灰色粘質土など)を除去するとオリーブ灰色シルト質細砂を始めとする整地層が存在し、整地層中には一部に焼上、炭が混入する。1区および2・3区東半では火を受けた状況の第5遺構面が検出されるが、2・3区西半では第3遺構面と同一面である。第5遺構面以下は整地に伴う複雑な層序となる。遺構の切合状況と断面観察から第7遺構面は存在するが、明確な遺構の検出は第7遺構面(茶褐色細砂)上であった。これより下層は工事影響深度となり、杭部分において可能な限りの掘下げを行ったが、細砂層の堆積であり、遺構・遺物は確認することができなかった。



fig. 3 調査風景 (写真)

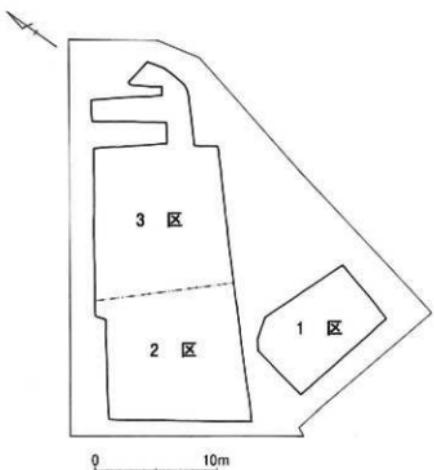


fig. 4 調査区割図

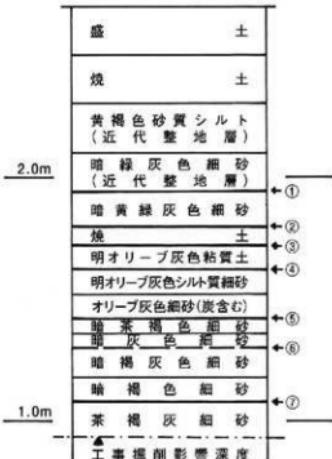


fig. 5 基本土層図 (1区)

第2節 第6・7遺構面の遺構と遺物

第6・7遺構面では数多くの遺構、遺物を検出したが、前述のとおり第7遺構面上において検出したため、ここでは同一に報告を行なう。また、工事影響深度の関係上、検出遺構は工事影響深度内での掘削に留め、完掘は実施していない。

土 坑

調査区全体から多くの土坑、あるいは土坑状の落ち込みを検出した。また、これらの遺構内からは多くの遺物が出土した。以下主なものについて述べていきたい。

検出した遺構の中で全体の形状が明らかなものは、直径1.5m前後の円形のもので、その他は不定形な落ち込み状遺構である。出土遺物から中世と近世のものに区別される。

出土遺物

出土遺物のうち、図化できたものがfig. 6および7である。fig. 6-1～8は上師器の皿である。口縁部をつまみあげるようにして、やや外反させるタイプのもので、3～7の体部下半はユビオサエが顯著に確認でき、口縁部下にヨコナデを施す。8は灯明皿として使用されたと見られ、口縁端部付近にススが付着する。時期は15～16世紀頃のものと考えられる。10は土師器甕である。11、12は備前焼甕の口縁と考えられ、共に口縁端部は玉縁状を呈する。14世紀後半から15世紀にかけてのものと考えられる。13と14は青磁で、13は碗、14は壺の底部と考えられる。15は須恵器甕、19は須恵器鉢である。14～15世紀頃の時期が考えられる。22は備前焼鉢で、口縁部外側に面を有する。内面の押目は疊らな箋描である。14世紀後半～15世紀代のものと考えられる。

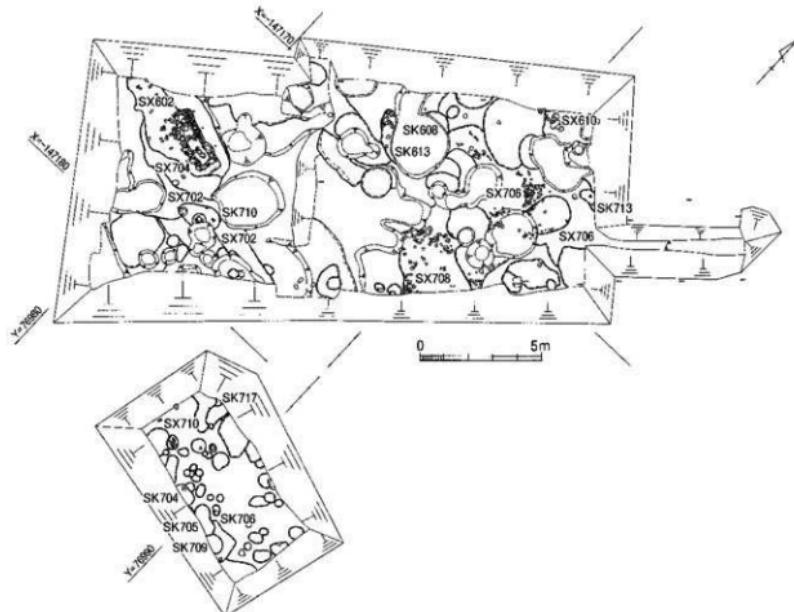


fig. 6 第6・7遺構面平面図

3区ではSX706~709を中心に、多量の瓦が出土した。大半が破片となり破損している状況で、一部には火を受けた痕跡も確認された。丸瓦、半瓦、鬼瓦などが存在する。

fig. 8はSX708からの出土遺物である。23~25が丸瓦で26は鬼瓦である。丸瓦は凸面が共に板小口によるタテ方向のナデ調整後に、全体を丁寧にナデ消している。23、24では、前方の一部にタテ方向のナデ痕がハケメ状に残る。玉縁との連結面段部は面取を施す。凹面に布目が残る。SX708出土丸瓦には凹面に崩紐痕が確認できるものがある。

鬼 瓦

26の鬼瓦は一部が欠落するが、二本角と考えられ、眼は中空ではない。ヘラとナデによる調整がなされている。断面が比較的厚いことから、古材の特徴を表している。

これら3区の第7造構面から出土した瓦の時期については、丸瓦の内部連結面の段部に面取が施されており、その出現は法隆寺の瓦の変遷から室町時代後期(1436~1495年)とされる。また鬼瓦の二本角の出現は、同じく室町時代前期(1361年~1397年)、眼の中空化は室町時代中期(1397~1436年)とされる事から、SX708出土鬼瓦は二本角があり、眼が中空化していない点からみて、概ね15世紀前半頃と考えられる。

近世遺物の出土から第6造構面に属するものとした造構からも、中世の遺物が多く出土したが、出土状況から混入したものと考えられる。この内fig. 7~9、18は共に陶器で、瀬戸・美濃系の製品と考えられる。9は天日茶碗で14~15世紀代、18は折縁深皿で15世紀前後、21は丹波焼鉢でヘラ描の摺目を施す。14~15世紀代の時期が考えられる。

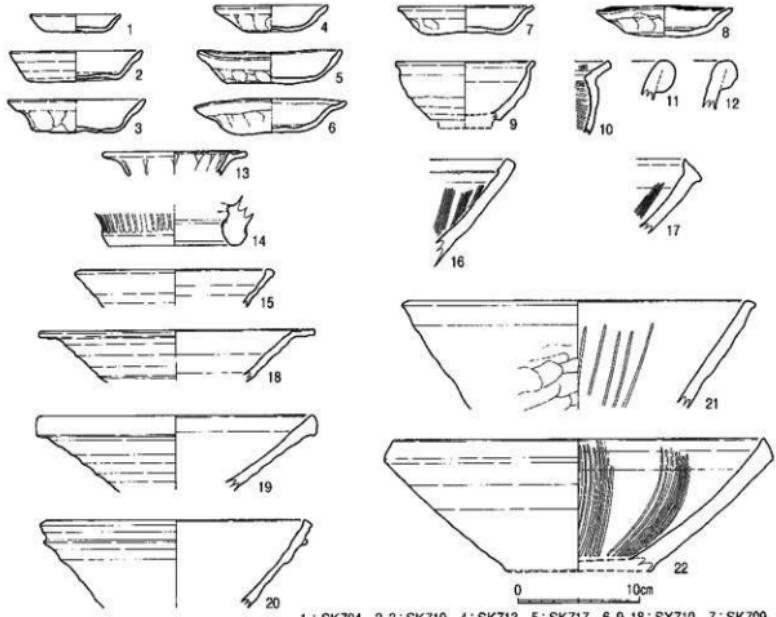


fig. 7 第6・7造構面出土遺物

1: SK704 2, 3: SK710 4: SK713 5: SK717 6, 9, 18: SX710 7: SK709
8, 13, 14, 17, 20: SX706 9, 18: SX610 10~12: SX702 15: SK705 16: SK708
19: SX704 21: SK613 22: SK708

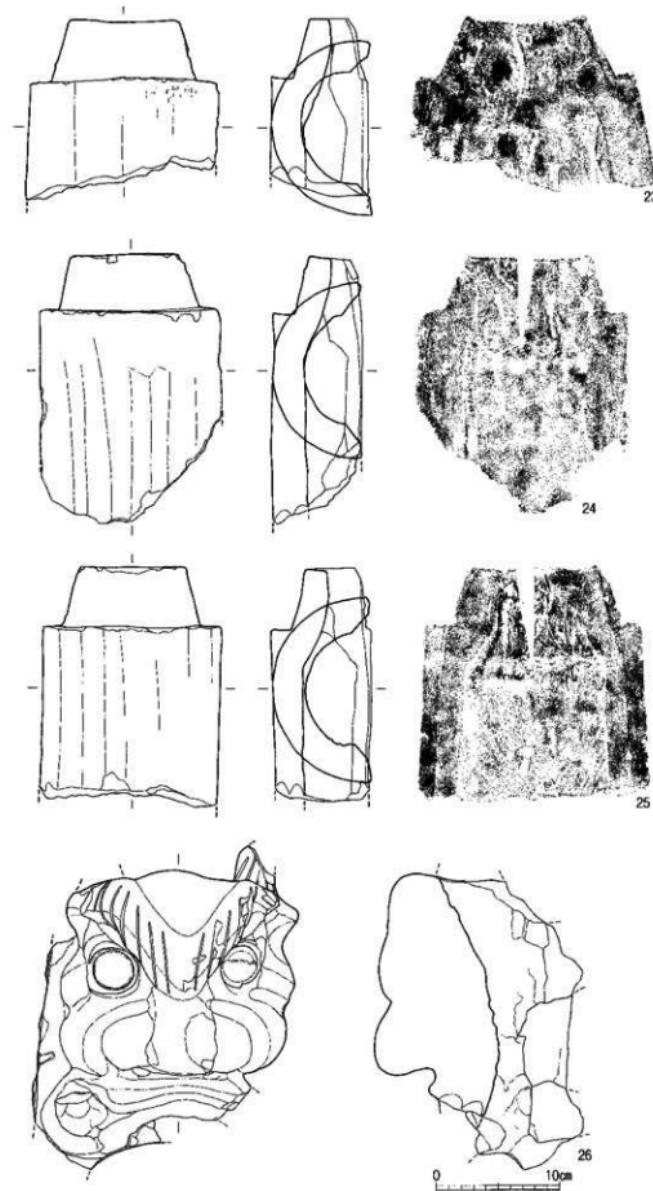


fig. 8 SX708出土遺物

SX602

2区南半では不定形な落込みに伴う石組遺構を検出した。石組は全長2.6m、中央部の幅1.0mで、内法で全長2.2m、幅0.45m、検出面から底までの深さは0.35mである。主軸はN-78°-Wで、中央部付近からやや北へ振りN-60°-Wとなる。石材は人頭大から一抱え程度の石材で積み上げているが、北側壁面は崩壊したものか、積方に乱れが見られる。屈曲してやや北に振る中央部では、底部に間仕切り状に石材が据えられている。この間仕切りから東側の石材の積み方は、比較的大きな石材を最下段として、その上に人頭大の石材を2~3段積とするのに対して、間仕切りから西側では大振りな石材を用いて2段積とするなどの差異があり、この点から元来は間仕切り部分が西側であったものを北西側へ延長した可能性が考えられる。掘形は一部の断面調査による確認に留めた。検出面から0.3~0.4m程の深さで掘り窪め、石組を設けている状況が確認された。

出土遺物

出土遺物の中で図化できたものがfig. 10である。27は肥前系の磁器皿で、高台からやや内湾しながら立ち上り、口縁部下方での字状に屈曲する、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、口縁部内面に菊花と草花文が描かれ、高台は疊付部分のみ釉を剥ぐ。28も肥前系と考えられる陶器皿で27と同様の器形である。内面見込みに胎土目、高台は低く高台脇との区分は明瞭ではない。29は丸瓦で凸面は板小口によるタテ方向のナデ調整後、前方はヨコ方向にナデ調整を施す、内面は布目痕が残り吊り紐痕（A類）が確認できる。30~32は陶器擂鉢である。30、31は鉄軸、肥厚させて折り返す口縁で、山口県須佐唐津窯産陶器擂鉢に類似する例がある。32は丹波焼擂鉢と考えられ、クシ描の擂目を施し、体部外面にユビオサエによる調整が顕著である。概ね17世紀後半頃の時期が考えられる。

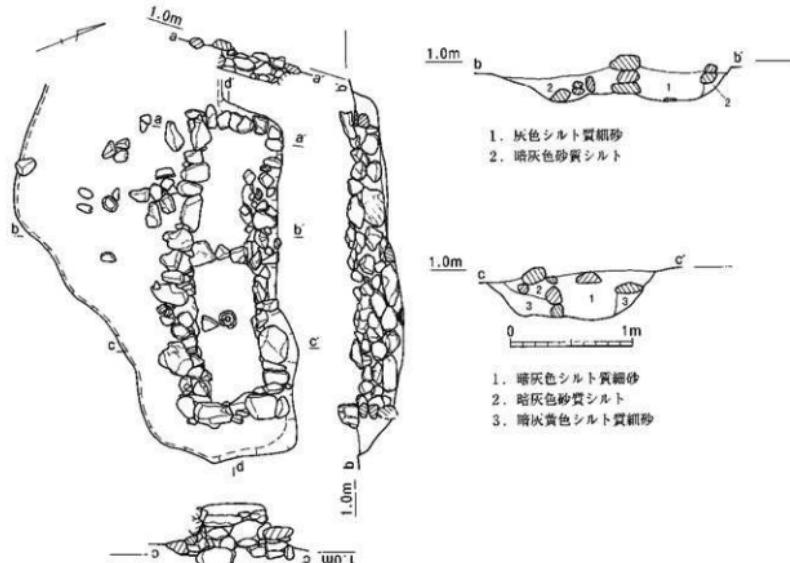


fig. 9 SX602平面・断面図

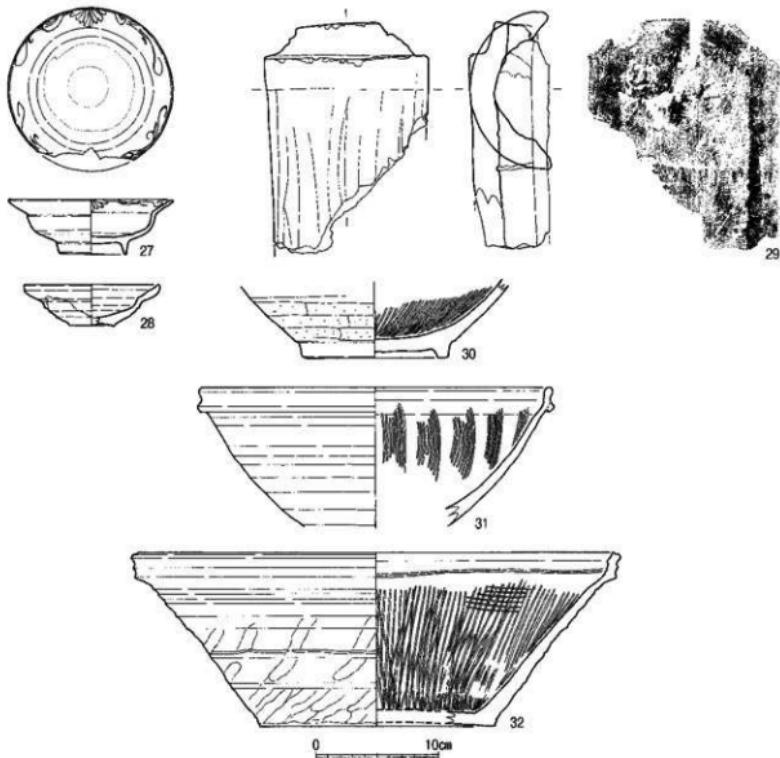


fig. 10 SX602出土遺物

遺構に伴わ

ない遺物

第6・7遺構面の整地土層及び遺物包含層（暗褐色細砂）からの出上遺物で図化でき

たものがfig. 11である。33～37までは土師器皿、38は須恵器鉢、39は丸瓦である。

十師器皿は外反させる体部で、下半にはユビオサエが顕著、口縁部下にヨコナデを施す。33の内面と口縁部にはススが付着する。39の丸瓦内面に縦位の繩タキが残り凹面には布日痕が確認できる。39は鎌倉期、土師器は15～16世紀の時期が考えられる。

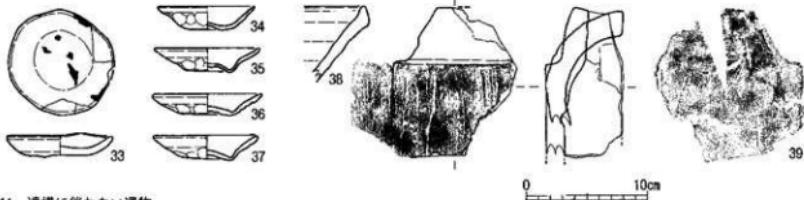


fig. 11 遺構に伴わない遺物

第3節 第5造構面の遺構と遺物

第5造構面は、2区は上層の第3造構面と同一面である。遺構は町屋4棟、土坑4基、埋納遺構1基、ピットを検出した。1区と3区東半には焼土面の拡がりが確認された。

- 町屋** 1区で1棟(SB501)、3区から3棟(SB502~504)の町屋を検出した。火災を受けたものと推定され、焼土面の範囲が町屋であると考えられる。検出状況及び上層の町屋遺構のあり方から、間口を東側に面する、東西主軸の屋敷地割であると考えられる。
- SB501** 1区全体で焼土面を検出した。礎石は調査区の東端及び西端の一部での検出に留まり、建物の東西・南北共全体の規模は不明である。直径0.2~0.65m、検出面からの深さ0.1m前後のピット26基を検出した。陶器、瓦、土師器等の細片が出土している。
- SB502** 3区北半東壁付近で検出した町屋であるが、西側が搅乱による影響を大きく受けしており、全体の規模は不明である。東西方向に並ぶと考えられる礎石を2ヶ所で検出した。
- SB503** 3区南半東寄りで検出した町屋である。南北両端が外方へ落ち、これより屋敷地の東西幅は5m前後と考えられる。SB501、502に比べ、SB503の床面は約0.1m高い。北側で移動した礎石4石を検出した。貿易陶磁、陶器、瓦 (fig. 14) 等が出土した。
- SB504** 3区北端部で検出した町屋である。狭小な調査区と北東側が搅乱の影響を受けており、詳細不明である。東壁側での上間状の高まりの検出から、SB502と区別した。貿易陶磁 (fig. 14-41)、銅鏡 (fig. 36-155・157)、陶器、磁器、土師器、瓦等が出土した。

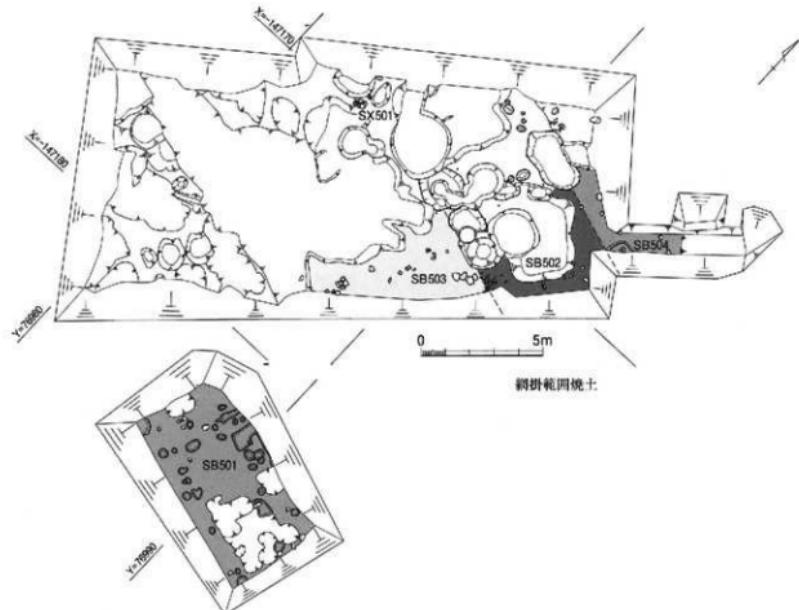


fig. 12 第5造構面平面図

出土遺物

第5遺構面の町屋からの出土遺物で、図化できたものがfig. 14である。40、41は貿易陶磁である。40は磁器底部で高台内に鉢款がある。41は青磁で、見込みに土の文字と菊花花状の印刻がある。42は丹波焼播鉢、ヘラ描の播目である。43は軒平瓦で瓦当に唐草文、内・外区境に界線がある。長田区長田神社境内遺跡第11次調査出土瓦に同型瓦が存在する³¹。44は軒丸瓦で瓦当部を欠落する、凸面ヘラナデ、凹面コビキBによる調整、胴部には釘穴がある。これら出土遺物は概ね16世紀後半の時期と考えられる。出土状況から考えて、下層の占い遺物が第5遺構面整地時に混入したものと推定される。

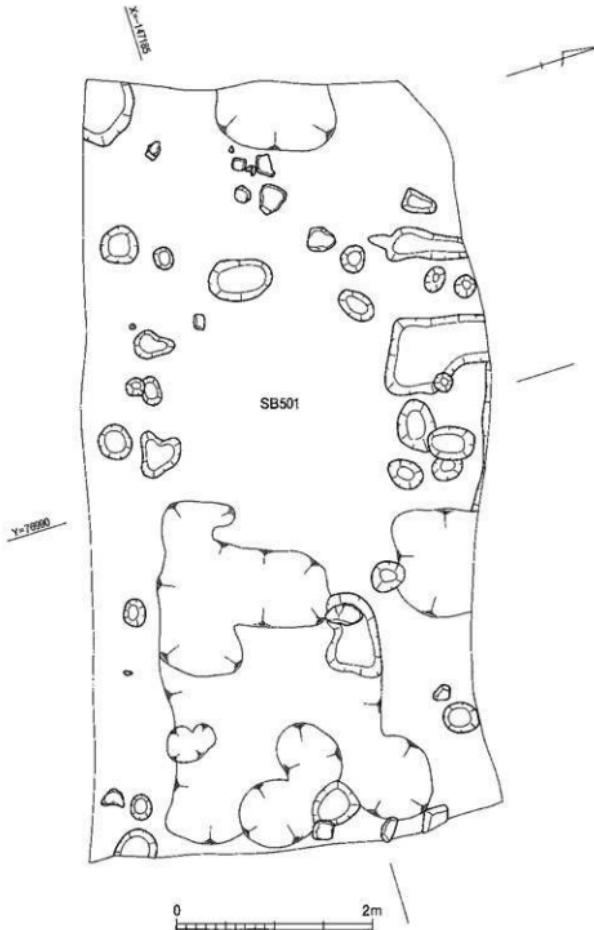


fig. 13 1区第5遺構面平面図

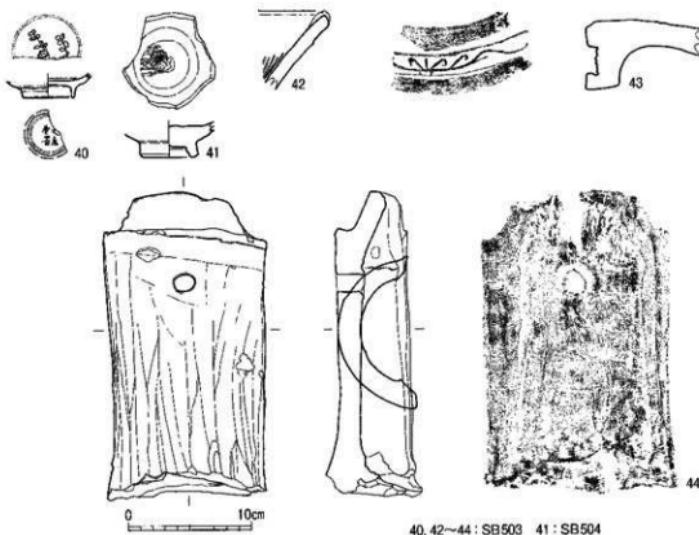
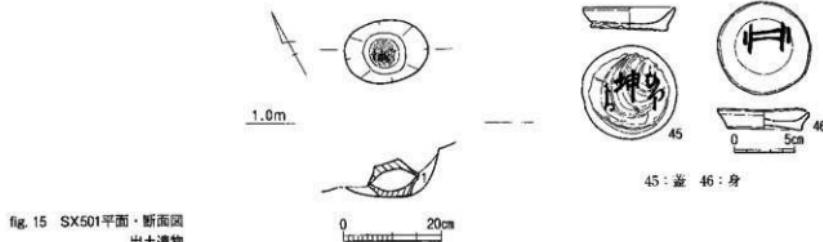


fig. 14 SB503・504出土遺物

fig. 15 SX501平面・断面図
出土遺物

SX501

3区南半部で検出した埋納遺構である。長径0.17m、短径0.13m、検出面からの深さ0.08mの楕円形内に、2枚の土師器皿の口縁部を合口にして埋納している。土師器皿内の上は水洗選別作業を行なったが、遺物の出土はなかった。上の皿（fig. 15-45）の底部外面中央に「坤」、その右には「ひつし」、左には「さる」の墨書きがあり、文字は南を上部にしていた。下の皿（46）の内面には記号状の墨書きがある。「坤」は方角を示すもので、祭祀に伴う埋納遺構と考えられる。土師器皿は共に底部糸切木調整である。また、SX501の近隣地の整地土層中から墨書きのある土師器皿2点が出土した。（fig. 16）。47の底部外面の中央に「巽」、その右に「たつ」、48は内面に記号状の墨書きがある。

fig. 15, 16の土師器皿は共に17世紀中葉～18世紀前半の時期が考えられる。

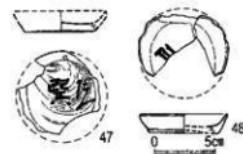


fig. 16 遺構に伴わない遺物

第4節 第4造構面の遺構と遺物

第4造構面は2・3区では検出されず、1区でのみ検出された。第5造構面上層の火災層の整地後に、明オリーブ灰色シルト質細砂やオリーブ灰色シルト質細砂により貼上状に整地を行ない、生活面を形成している。

町屋 SB401 SB401は検出状況から、下層の第5造構面SB501とはほぼ同じ屋敷地割で、東西主軸に構築された町屋と考えられる。調査区の西端部において、礎石の一部か若しくは町屋に関連すると考えられる、幅0.4mで南北に続く2列の石列を検出した他、調査区南西端で、

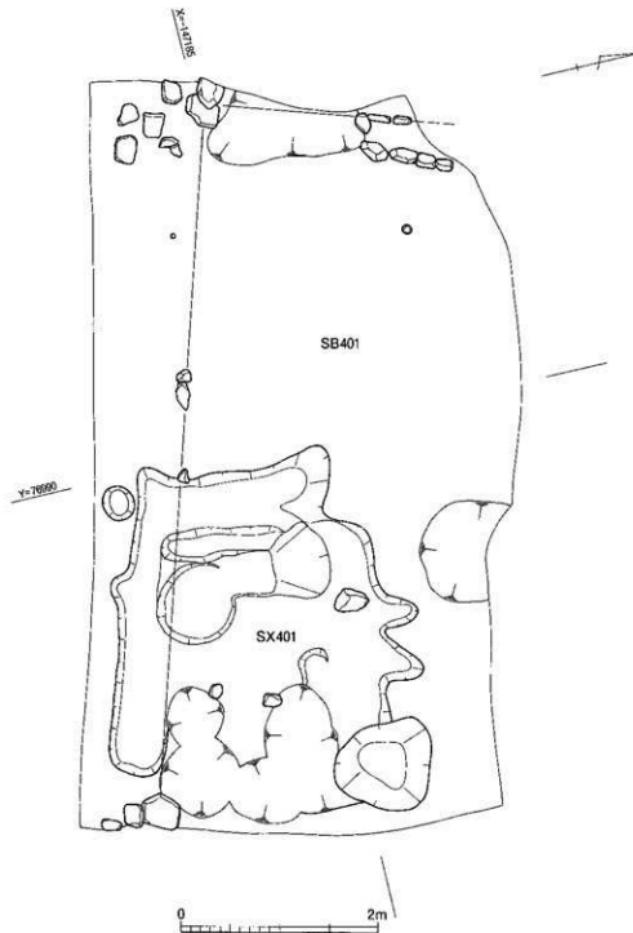


fig. 17 1区第4造構面平面図

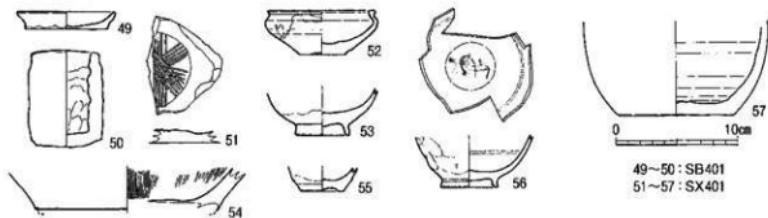


fig. 18 第4遺構面出土遺物

建物の南西角となるものと考えられる礎石、調査区の中央部やや南よりで東西方向に並ぶ礎石2石を検出した。礎石の並びから、SB501では判然としなかった1区の町屋の南側ラインは、礎石の位置から調査区南壁から北へ、東側で0.45m、西側で0.25mを結ぶラインであると推定され、建物の主軸はN-75°Wに復元できる。北、東側についてはさらに調査区外へと続くものと考えられる。西側は検出した礎石のラインがほぼ建物の西側の範囲を示唆するものであろう。出土遺物は、西半部の遺構面上から土師器皿1点 (fig. 18-49)、銅錢 (寛永通寶 fig. 36-170) 1点が出土した他、南半部で土師器の焼塩壺1点 (fig. 18-50) が出土した。

出土遺物

SB401からの出土遺物は非常に少なく、fig. 18-49・50がこれらの中で図化することができたものである。49の土師器の皿は、糸切未調整の底部から外反気味に体部が立ち上がる。17世紀中葉～18世紀前半の時期が考えられる。50の焼塩壺の身は、外間に刻印などは認められない。手づくねによる整形と考えられ、内面にはユビオサエが観察できる。焼成は良好ではなく脆い。

SX401

調査区の南半部で検出した不定形な大型土坑である。掘形は東西3.15m、南北3.15mの範囲で、検出面からの深さ0.05～0.3mである。壙上は炭若しくは炭を多く含む。検出状況からSB401に伴うものではなく。第5遺構面の火災後の片付けおよび整地の際に土坑状の掘り込み内へ、炭などを廃棄したものである可能性が考えられる。

出土遺物

SX401内の出土遺物で、図化することができたものがfig. 18-51～57である。

51、54は陶器擂鉢である。51は内面見込みへの擂日の施文パターンから堺・明石系擂鉢と考えられる。54も底部を欠落するが、堺・明石系擂鉢の可能性が考えられる。52～53、55、57は陶器、56は磁器である。この他、銅錢、煙管 (fig. 36) が出土している。

第4遺構面 の時期

第4遺構面は遺構面上に火災等により火を受けた痕跡は確認できない。SB401の時期は出土した土師器皿 (fig. 18-49) から、概ね17世紀中葉～18世紀前半と考えられる。第5遺構面SX501の出土遺物 (fig. 15) と比較すると、ほぼ同時期であることから、第4遺構面の時期はSX501よりもやや新しい17世紀後半頃～18世紀前半と考えられる。

第4遺構面は1区でのみ検出された事から、町屋の屋敷地割の中で1軒分、若しくは数軒分で整地の単位や時期に差異があり、その変遷過程の中で短期間の整地（造成）、町屋の建替等に伴い、時間的な差が生じているとも考えられる。この事から屋敷地別に細かな変遷がみられる可能性が推察され、町の変遷の検証には詳細な検討が必要である。

第5節 第3造構面の遺構と遺物

第3造構面は焼土層に覆われていた。1区および3区東半は造構面が強く火を受けており、他も焼土や炭の拡がりが所々に確認される。調査区外へも続くことから、火災の被害の大きさを物語る。以下主な遺構と遺物について述べていきたい。

町屋

SB301

町屋は1区および3区の東半から検出した。屋敷地割は第5造構面とほぼ同様である。

1区で検出した町屋である。建物主軸は第4造構面SB401とほぼ同一のN-75°-Wである。SB301では良好な状態で町屋遺構を検出できた。調査区の南壁から北へ0.45m前後は乳白色細砂で、南壁側は南へ落ちて行く状況が確認でき、焼上が堆積していた。これより北は貼土をしており、強い火勢により硬く焼縮まる。東側は東壁沿いに掘り込みが検出され、拳大の礎石が南北方向に並ぶ。西側は東壁側の礎石列から6.75m前後で西へ落ち、その落ち際に拳から人頭大の扁平な石材で、南北方向に礎石列が続く。また、その西側はさらに土坑状に窪み、瓦片がまとまって出土した。南側は乳白色細砂層との境から幅0.75m前後、深さ0.15m前後で溝状に窪む。この窪みの北側の片に沿って礎石、ピットが点々と続く。北側は礎石列の北側0.15~0.3mで、北壁沿いに北へ落ちて行く状況が検出された。西から検出された礎石列は東西間が7.0m、南北間が2.7mである。遺構面上からは炭化物の拡がりが検出され、柱材と思われる炭化材も検出された。

SB301は検出状況から、西側以外は調査区外へ拡がる可能性があり、建物全体の規模は不明である。東側も南西で礎石列を検出したが、さらに東へ延びる可能性がある。

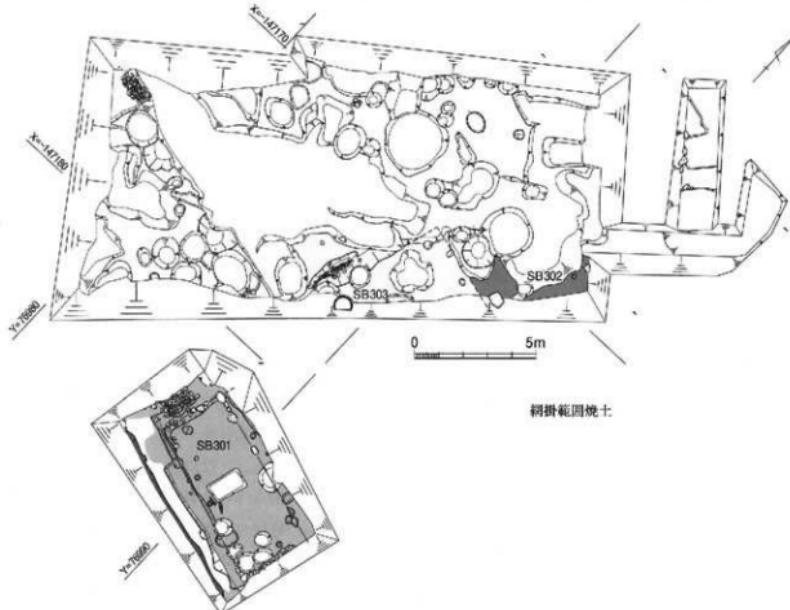


fig. 19 第3造構面平面図

SB302・303

3区東半で検出した。共に西側を中心に擾乱の影響を大きく受けている。SB303西側は西へ落ち込み、南北方向に陶器、磁器、瓦がまとまって出土している。このラインはSB301西側の落ち込みラインよりやや西に位置するが、方向はほぼ一致する。町屋の東西軸は長短があるものと考えられる。SB302から南北幅はほぼ3m前後と推定される。

土 坑

町屋群の西側では大型の土坑、落ち込みが検出されたが、錯綜する切り合いから、それぞれの所属の特定は困難である。町屋よりも一段低く第5造構面とも同一面である。町屋の背後は空間地と利用され、廃棄土坑などが繰り返し掘られたものと推定される。

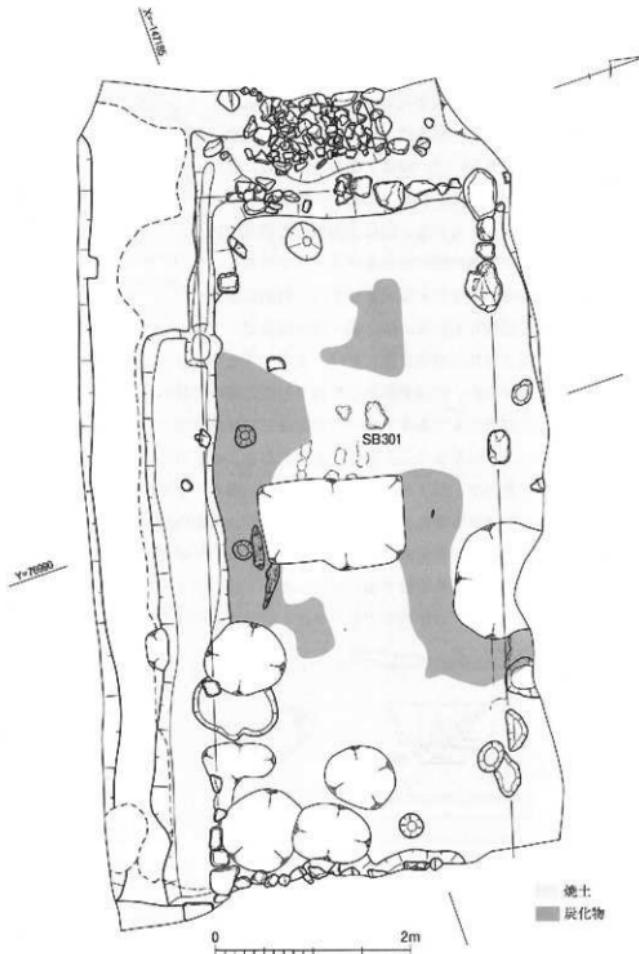


fig. 20 1区第3造構面平面図

出土遺物

町屋群からの出土遺物の大半は細片であり、図化できたものはわずかであった。(fig. 21)

61はSB301から出土した軒丸瓦の瓦当部である。左巻三巴文で、珠文はやや小さい。

17世紀代のものと考えられる。

58~60、62はSB303からの出土遺物である。60は陶器で、瀬戸・美濃系の鉄釉耳付水注で、瀬戸・美濃編年の連房Ⅱ~Ⅲ期のものに類似する。58、59は磁器で、59は肥前系と考えられる。62は鳥食で、上面に3ヶ所の穿孔がある。これらは17世紀後半代の時期が考えられる。

焼土層

第3遺構面を覆う焼土層からの出土遺物がfig. 22である。63、64は土師器の皿で共に底部は糸切である。17世紀中葉から18世紀前半のものと考えられる。65は土師質の灯明具で、皿形の灯明皿の脚の付かないタイプである。体部内面に抉りのある突帯をもつ。外面に透明釉を施釉している。66、68~73は陶器で、

66の碗は白釉に黒釉を流しかけ、萩焼と考えられる。伊丹郷町、明石城武家屋敷などに類似例がある。67は肥前系磁器碗で外面に薺の葉状のコンニャク印判に草花文がある。68は丹波焼火人である。69~71は擂鉢で70は備前焼、71は肥厚させた口縁部を折り返しており、鉄釉をかける。胎土は軟質である。fig. 10~30・31と器形、焼成、胎土に共通要素が多いが、31よりも口縁部折り返しが薄く、体部内面の擂目は放射状で細かい、山口県須佐唐津窯産に類似例がみられる。72は鉄釉の灯明具である。73は備前焼大甕口縁部で16世紀~17世紀前半の時期が考えられる。町屋群及び焼土層からの出土遺物は概ね17世紀後半~18世紀前半頃と考えられ、下層の第5・4遺構面出土遺物と比較すると、第3遺構面は17世紀後半でもやや新しい時期から18世紀前半の時期も考えられる。

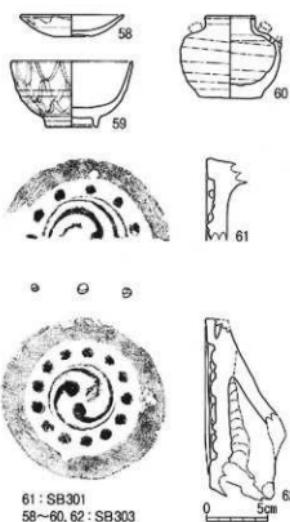


fig. 21 SB301・303出土遺物

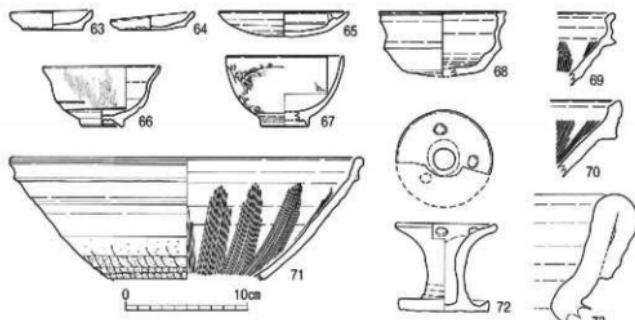


fig. 22 焼土層出土遺物

第6節 第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面は、第3遺構面を覆う焼土層の上面に検出される。1区では一部に焼土層の上面に十間状の貼土が検出されたが、町屋として確認することはできなかった。また、2・3区については、後世の搅乱の影響を受けて、大きく被損して遺構面も遺存していない状況であり、わずかに2区南半と北西角で確認することができたのみであった。

以下、主要な遺構と遺物について述べたい。

町屋

1区は搅乱の影響をほとんど受けおらず、良好な状況で遺構面を検出できたが、数基のピットが検出された以外は、礎石等は検出されず、第5遺構面以降連続と統いてきた町屋、および屋敷地割は検出できなかった。現存している絵図等から調査区付近は町屋としての土地利用が推定されるが、詳細は不明である。

土坑

2区南半から円形や不定形な大型土坑7基を検出した。

2区南半は、検出した土坑群の分布状況から、第2遺構面についても第5遺構面から第3遺構面までの屋敷地において、町屋部分とその背後の空間地としてのあり方と同様に、町屋背後の空間地としての利用が推定されるが、後世の搅乱および第1遺構面の遺構との切り合いにより、これら土坑群の所属の特定は困難である。2区において、わずかに拡がる第3遺構面を覆う焼土層が確認できたため、この上面から切り込む検出状況から第2遺構面からの検出とした。

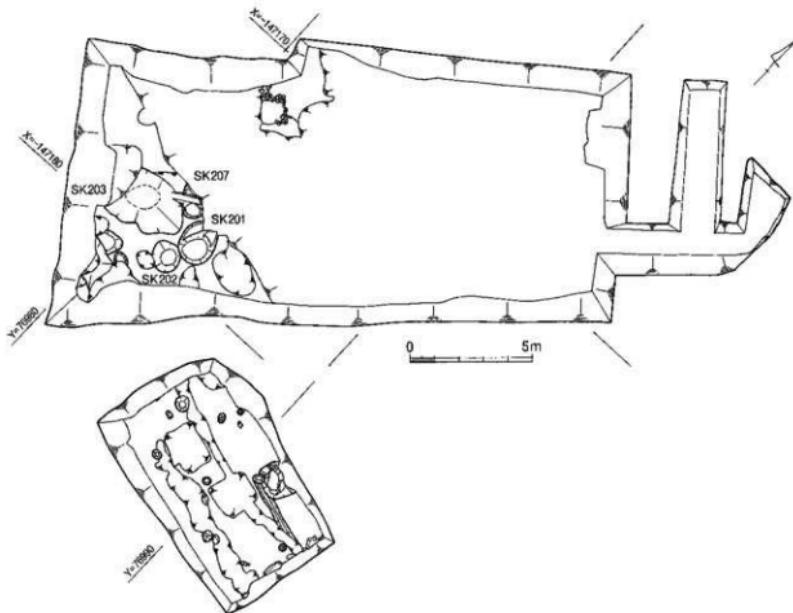


fig. 23 第2遺構面平面図

SK201

2区南半やや東よりで検出した土坑である。長径1.8m以上、短径1.4m、検出面からの深さは1.0mである。陶器、磁器、瓦、土師器、鉄製品が出土した。fig. 25は、SK201からの出土遺物である。

74と75は肥前系の磁器碗である。体部外面にコンニャク印判により74に桐、75は菊花状文様の印判がある。76は軒丸瓦で瓦当は左巻二巴文である。凸面は板小口によるタテ方向のナデ調整、凹面はコビキBの調整で瓦当との接合部はヨコ方向のナデ調整である。

77は軒平瓦で、瓦当は橘唐草文、凸面と凹面共丁寧なナデ調整である。78、79は丸瓦で、78は凸面が丁寧なナデ調整だが、前方部にハケメ状に板小口によるナデが残る、凹面には布目が観察される。79は凸面はタテ方向のヘラナデ調整、凹面に内タキが認められる。

SK201の時期は77から、19世紀代と考えられる。

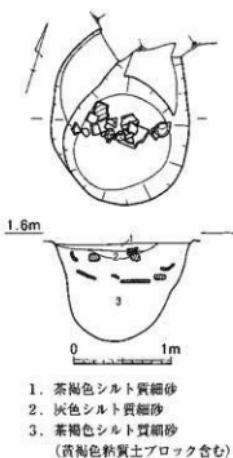


fig. 24 SK201平面・断面図

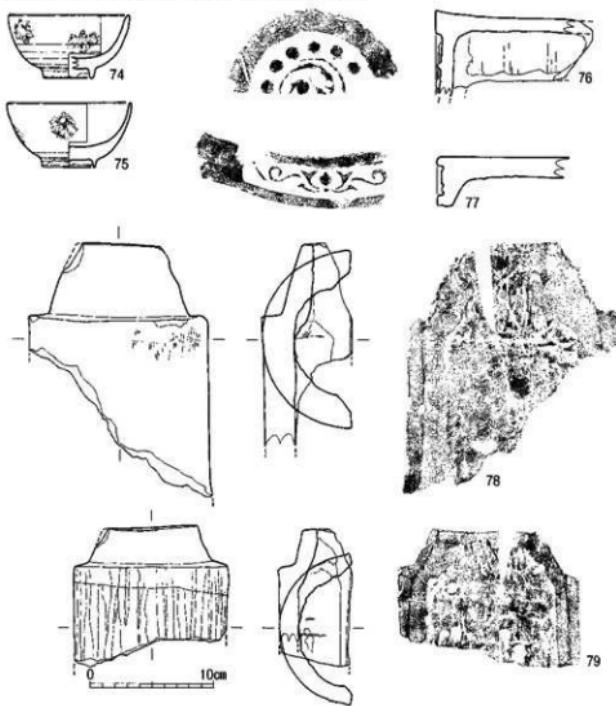


fig. 25 SK201出土遺物

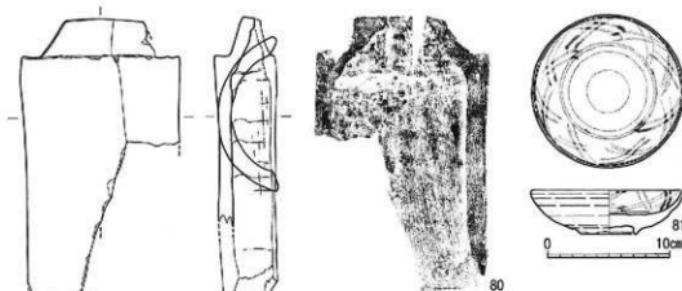


fig. 26 SK202出土遺物
SK202

直径1.3m前後、検出面からの深さ0.56mの土坑で、SK201により北側を切られる。陶器、磁器、瓦、土師器が出土した。fig. 26~80は丸瓦で凹面に鉄線の切離痕と布目痕がある。81は肥前系の磁器皿で内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。19世紀代の遺構である。

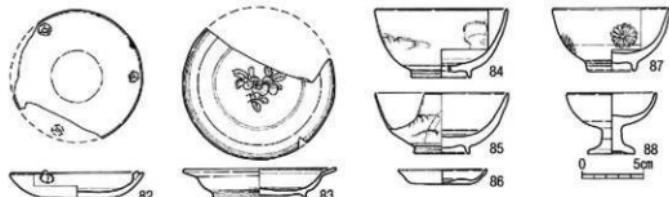


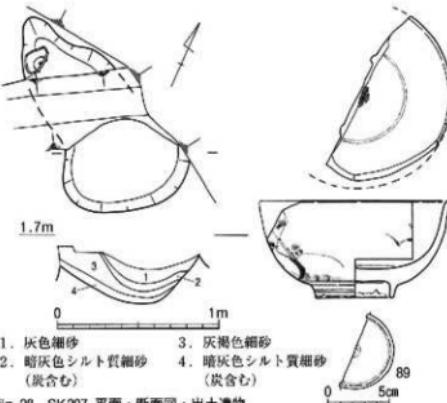
fig. 27 SK203出土遺物
SK203

長径3.0m、短径2.3m以上の大型の土坑である。工事掘削影響深度の関係上、完掘することはできなかった。陶器、磁器、瓦、土師器、金属製品が出土した。fig. 27~82は土師質の灯明具で施釉、83~88は肥前系の磁器である。83は皿で、84~85・87は碗、88は仮飯具である。87の碗には外面に、コンニャク印判による菊花状の印判がある。86は土師器皿で、底部は糸切である。SK203は18世紀後半~19世紀代と考えられる。

SK207

2区ほぼ中央で検出した長径1.4m、短径0.7m以上、検出面からの深さ0.35mの土坑で、中央部と北側を搅乱に切られる。陶器、磁器、瓦、土師器が出土したが、大半が微細な細片であった。fig. 28~89は肥前系磁器碗で、内面見込みに印判による五弁花文、高台内面には満福の銘款がある。

18世紀代と考えられる。fig. 28 SK207 平面・断面図・出土遺物



第7節 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面は、調査区の北半が後世の擾乱による影響を大きく受けしており、1区および2区の南半で遺構面が遺存していたのみであった。第1遺構面からの検出遺構は、1区では上間状の貼土が検出されたが、礫石等は検出されず、第2遺構面と同じく町屋として捉えることはできなかった。確認できたものは2区からの堀状遺構1基、土坑8基であった。以下、主要な遺構について述べる。

SD101

2区のはば中央を貫通する北西から南東方向の堀状の遺構である。中央部は後世の擾乱により切られているが、東側で幅2.25m、西側で最大幅2.85m、検出面からの深さは、東側で0.9m前後、西側で1.2m前後であった。南側には護岸の目的を持つものか、拳から抱え大の石材を用いて、石積を構築しているが、所々で石材の存在しない部分があり、石垣状になっている状況ではない。尚この石積の中には石臼なども含まれていた。北側に石積は確認できず、石材の出土もなかった。石積からのSD101の主軸はN~75°Wである。埋土の土層観察から内部は、常に漏水しているような状況ではなかったものと考えられる。埋土内からは多量の遺物が出土した。

SD101の性格を考えると、第1遺構面についても、絵図等から、付近は町屋が並ぶ地域と推定されることから、町内の排水等の機能をもつものとも考えられる。西側が低くなっているため、排水の方向は西へ向かっていたものと推定される。

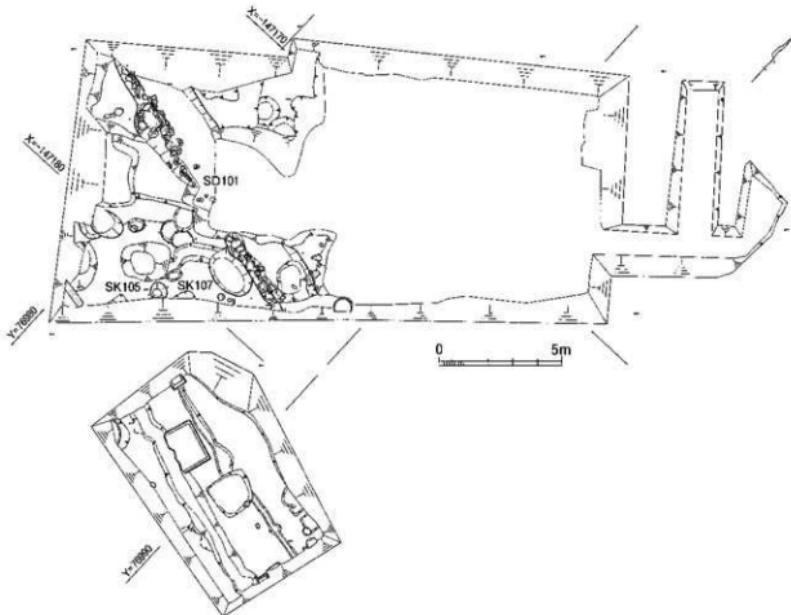


fig. 29 第1遺構面平面図

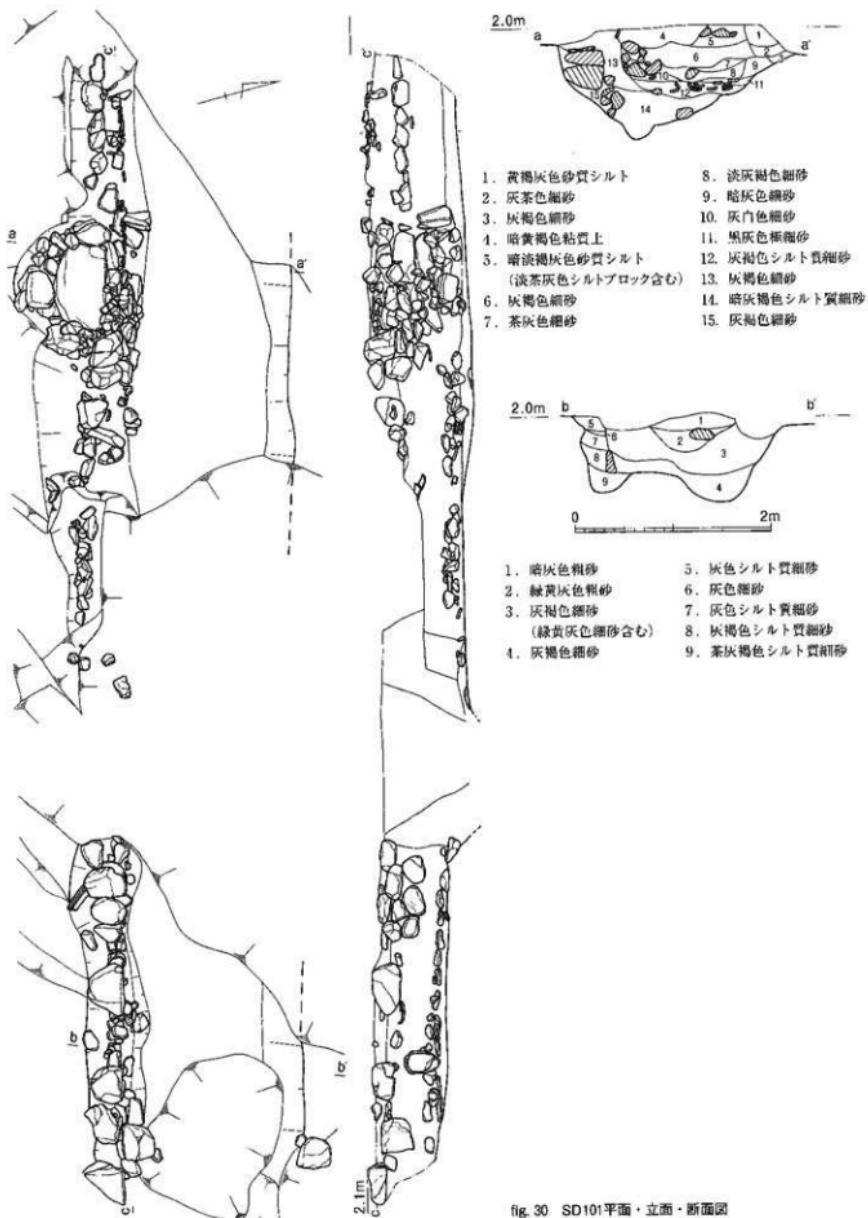


fig. 30 SD101平面・立面・断面図

出土遺物

SD101から出土遺物は多量で、多種にわたる。

fig. 31-90~92は土師器皿で、底部は糸切である。93~96、98は土師質の灯明具である。93、94、96は受口部無し、95は受口部を有する。98は有脚の受付皿である。99は施釉陶器の灯明具である。94の底部以外、95、96、98の口縁部の内面から口縁部には施釉がされている。97は底部糸切の皿である。100は肥前系磁器皿で外面は唐草文、内面は印判による蛸唐草文である。101は丹波焼火入で、把手がつく。102は磁器の紅皿、104、113は磁器碗である。113は肥前系の「くらわんか手」で、高台内面に銘款がある。103は陶器で外面に花弁の装飾がある。105は磁器小杯、106、107は陶器碗で106は肥前系、107は京焼系と考えられる。108は肥前系磁器皿で、内面見込みにコンニャク印判による五弁花文、高台内に銘款がある。109は肥前系磁器の油壺、110は在地の明石・舞子系陶器行平鍋蓋で、外面はトビガンナ施文、白泥彫描（蔓草）、鉄泥彫加彩である。111、112は肥前系磁器仏飯具、114、115は肥前系磁器の瓶、116は底部付近の破片であるが、ベトナム陶磁焼締長胴壺と考えられる。平安京内（平安京左京二条四坊十一町）の江戸時代前期造構出土遺物に類似例がある。胎土は比較的きめの細かい褐色土で、灰白色土と絞胎状に層になる。内面に強い輪轉目が残る。

fig. 32-117~119は土師器熔接、120は堺産と考えられる擂鉢で、口縁部片口部分に刻印がある。121~123は軒丸瓦で、共に瓦当は左巻三巴文である。121、123は珠文が小さ

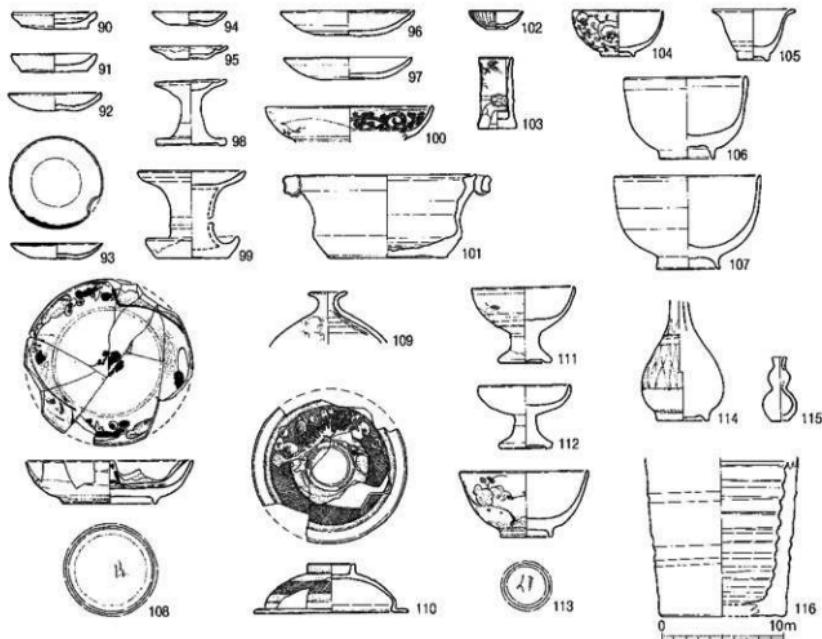


fig. 31 SD101出土遺物 (1)

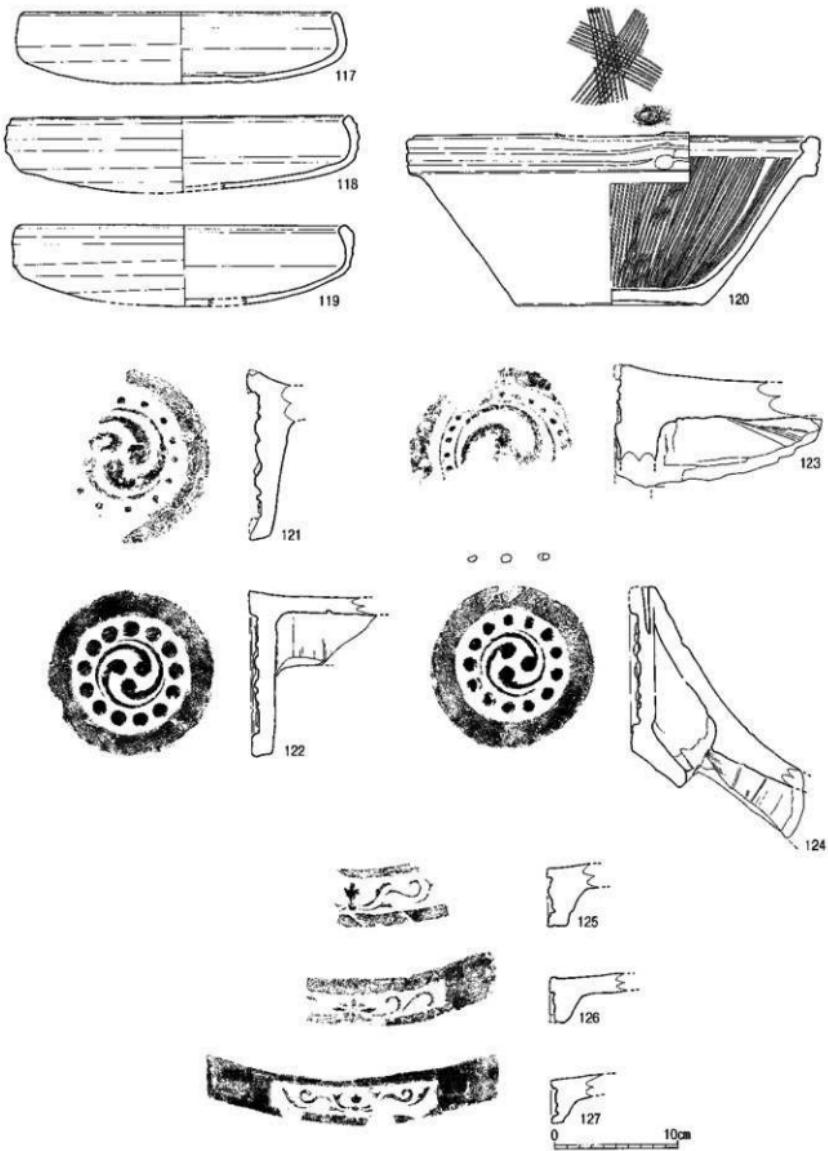


fig. 32 SD101出土遺物（2）

く多く、123は團線がある。122の珠文は13個で大きく高さは低い、124は鳥食で、瓦当は左巻三巴文である。珠文は13個で丸みをもつ、瓦当凸面に3ヶ所の穿孔がある。125～127は軒平瓦で、125、127は橋唐草文、126は中心飾が花菱状を呈する。図版17～128は瓦質火舎で、体部外面に獅子頭状の把手を貼り付けている。兵庫津遺跡第11・13次に類似例がある。この他鉄鎌（fig. 34-147）や、銅錢（寛永通寶）、簪、釘等の銅製品（fig. 36）が出土している。これら出土遺物は概ね17世紀後半から19世紀頃のものと考えられ、SD101の時期は18世紀後半から19世紀を中心とするものであろう。

第1遺構面

出土遺物

2区の第1遺構面では、SD101以西に土坑が複数存在する。この内fig. 33はSK105、107からの出土遺物である。SK105は長径0.75m以上、短径0.65m、検出面からの深さ0.4mの土坑で瓦、陶器、土師器が出土した。SK107は長径2.0m、短径1.2m以上、検出面からの深さ1.0mの土坑で、陶器、磁器、瓦、土師器が出土した。

129～132は軒丸瓦で、130がSK105。その他はSK107からの出土遺物である。全て左巻三巴文で、130は外縁部の幅は広く、珠文は16個でやや大きい高い、129は幅広の外縁部で、珠文は12個、大きくやや低い。131の珠文はやや小さく巴文の頭も小さい。132は珠文が小さい。SK105とSK107は130、129から19世紀頃の時期が考えられる。

遺構に伴わない 遺物

第1遺構面の擾乱土除去中に、表面に墨書きされた、漆喰状の塊3点が出土した。（図版17-133～135）、破片となっており、元來の形状は不明であるが、133の片面はやや内湾する面をもつ。聚材の一部である可能性も考えられる。それぞれの片面は滑らかに仕上げられており、表面に文字がわずかに確認できるが、判読することはできなかった。

この他、各遺構面、整地土内から多数の上製品、漁貝、石製品が出土した。

土製品

上製品には多くの種類の人形、面子などがある。（図版18）神仏、動物、器物や、土師質の秉燭、土製、陶製、瓦質の円盤、磁器戸車などが出土している。

漁 具

漁具は蛸巣、土錐などが出土している。（図版18）

石製品

砥石、硯（図版18）他、石臼が出土している。砥石、硯は使用の摩滅が顕著である。

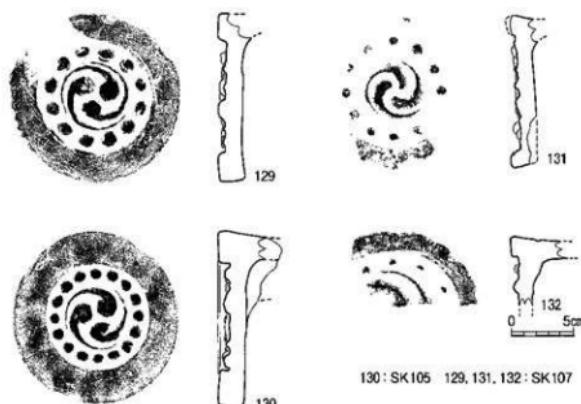


fig. 33 第1遺構面遺構出土遺物

第8節 金属製品

今回の調査で出土した金属製品は遺構に伴うものは少なく、その多くは第5・3遺構面を覆う焼上層及び各遺構面を構成する整地層内からの出土であった。金属製品は鉄製品と銅製品が出上している。ここでは一括して報告を行なう。

鉄製品

fig. 34は鉄製品である。136は鉄皿で断面は2~3mm前後である。底部は欠損する。140は上部及び下半も欠損しているが、上部に向かって広がる形状から簾の可能性が考えられる。142~146は木質が付着していることから釘である。147~150は鍤で、147はほぼ全体が遺存しており、柄の一部が残る。148は刃先部分の半分を欠損する。150は先端部付近のみで大半を欠損する。151は包丁と考えられる。他は用途不明品である。

銅製品

fig. 36は銅製品である。154~205は銅錢で、154~167が渡来銭、168~198が寛永通寶、204、205が船銭で、その他の銭種は不明である。

渡来銭は、154、155が開元通寶（初鋤966年）、156は至道元寶（初鋤995年）、157は咸平元寶（初鋤998年）である。158、160は熙寧元寶（初鋤1068年）、159は皇宋通寶（初鋤1039年）、161~163は元豐通寶（初鋤1078年）、164は淳祐元寶（初鋤1241年）である。165~167は破片であるが、165は景祐元寶（初鋤1004年）で、166は「政」の文字から政和通寶（初鋤1111年）と考えられる。167は「紹」の文字から、紹聖元寶若しくは紹聖通寶（共に初鋤1094年）と考えられる。157は南唐銭、164は南宋銭で、他は全て北宋銭である。

寛永通寶については、168~173が寛永13年（1636）以降に鋳造された古寛永通寶である。194は背面に「文」の文字が鋲出された所謂「文銭」（寛文8年〔1668〕初鋤）である。174~193、195~198は元禄10年（1697）以降に鋳造された新寛永通寶である。今回出土した寛永通寶には、元文4年（1739）以降に鋳造された寛永通寶鉄錢の出土は確認されていない。

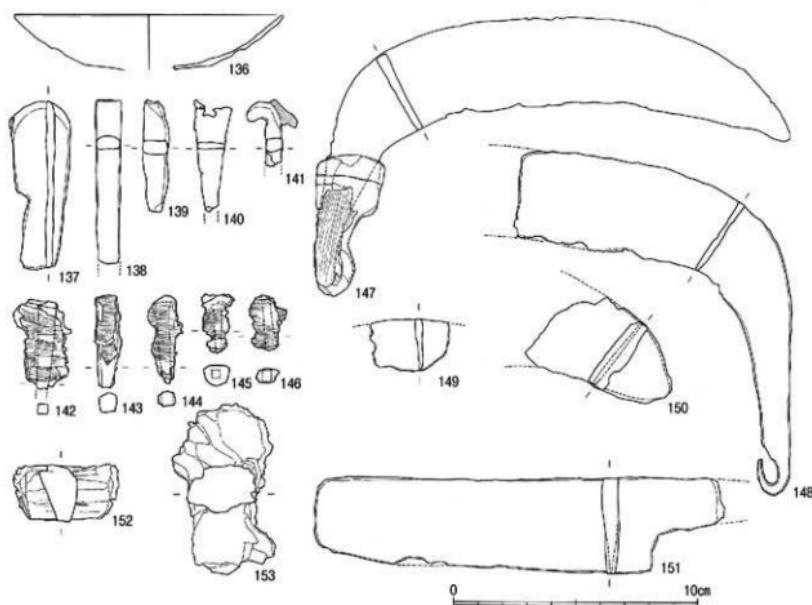
204は駒引銭で、205は形状及び銭径から絵銭と考えられるが、岡柄は不明である。

206~218は煙管である。206~210は雁首、211~218は吸口である。雁首の206と207は火皿下部の脂返しの湾曲は大きい、ラウとの接続部は欠損しており不明である。208~210の脂返しの湾曲は206、207に比べて小さい、208の火皿はやや大きな形状である。209、210は火皿部分を欠損するため、火皿の形状は不明である。吸口は共に直線的に延びる形状を呈する。

219は簪であると考えられる。220は釘で、221~223は鍤、224、225は銅輪と考えられる。226は円筒形のキャップ状金具で外面に草花文状の彫金が施されている。227は約半分を欠損するが鉢と考えられる。228~230は鍤金具で、共に菱形を呈する。228は花卉状の形状をしている。229は中央部に穿孔が確認できる。231、232は小柄の柄と考えられる。233は燭台と考えられ、土器盤皿内面中央に銅製の角柱状の金具を差し込んで立てて、燈芯としている。皿の内面にはススの付着が確認できる。

234~236は不定形な板状を呈する銅製品で、断面は1mm前後と薄いものである。形状は不明であるが銅板の一部であると考えられる。

237~239は用途不明な銅製品、241~243は鎔銅半製品である。



137 : SX706 139 : SK709 151 : SX602 143 : SK504 152 : 第3 遺構面上層
 136, 138, 140, 150 : SK203 148 : SK209 240 : 第2 遺構面上層 144, 147 : SD101

fig. 34 鉄製品

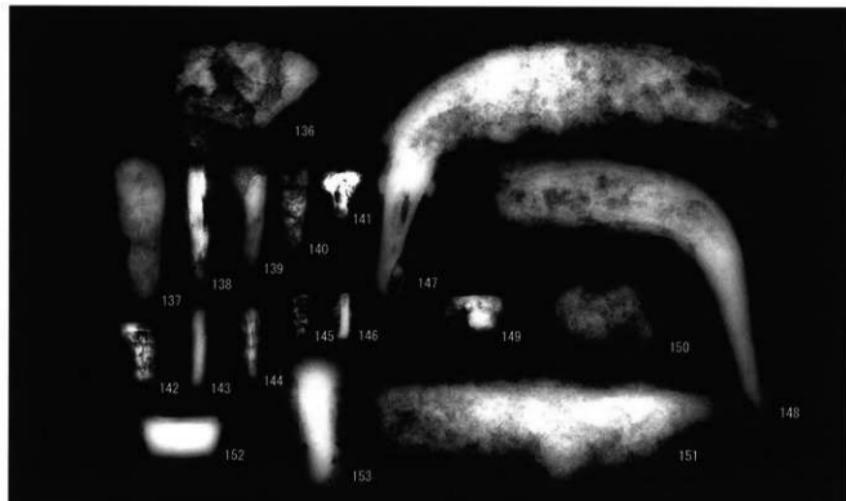
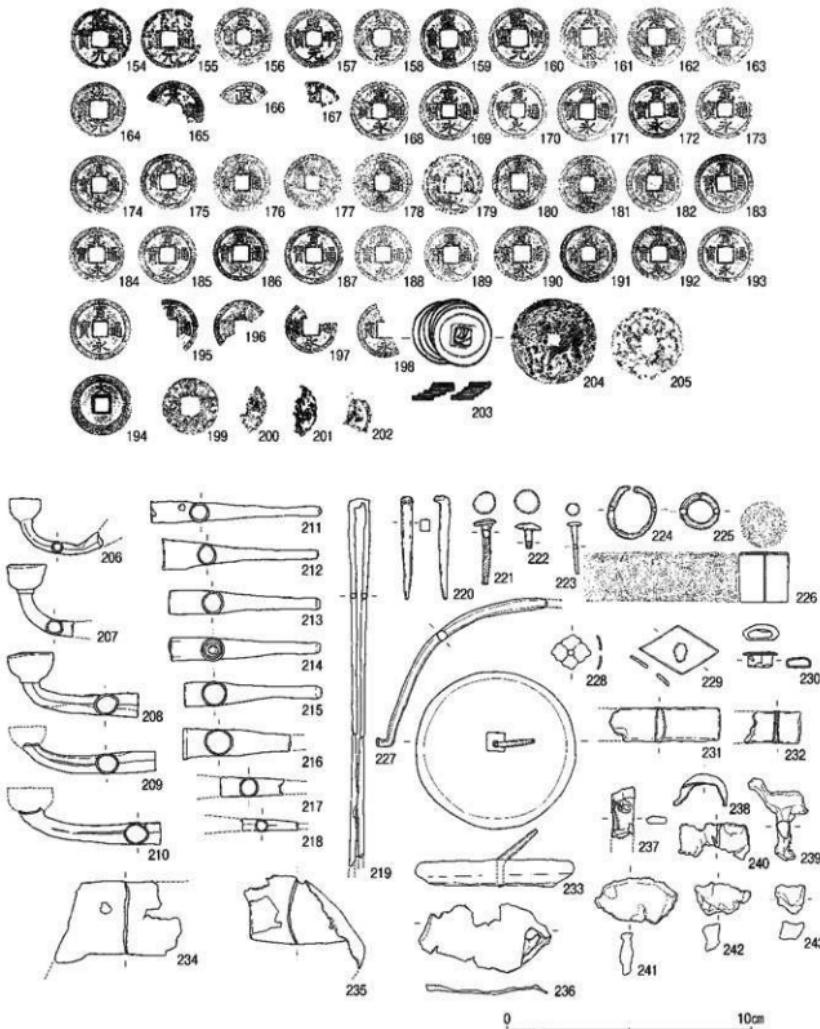


fig. 35 鉄製品X線透造像(写真)



154, 159, 187, 222, 234 : 第7道構面遺物包含層 236 : SK711 155, 157 : SB504 上層
 156, 202, 224, 230, 235 : 第5道構面土内 242 : SK502 239 : SK503 160~162, 185 : 第5道構面上層焼土層
 170 : SB401 163, 206, 217 : SX401 234 : SB301 213 : SB303土内 231 : SK302 194 : SK305 189 : SK313
 158, 165, 168, 169, 171, 173, 186, 188, 191, 212, 225, 232 : 第3道構面上層焼土層 199, 208, 214, 237 : 第3道構面上層
 210, 228 : SK203 183 : SP205 176, 179, 182, 197, 208, 213, 218, 223, 229 : 第2道構面上層 174, 178, 195, 200, 201,
 219, 220, 223, 241 : SD101 以外は擾乱内出土

fig. 36 銅製品

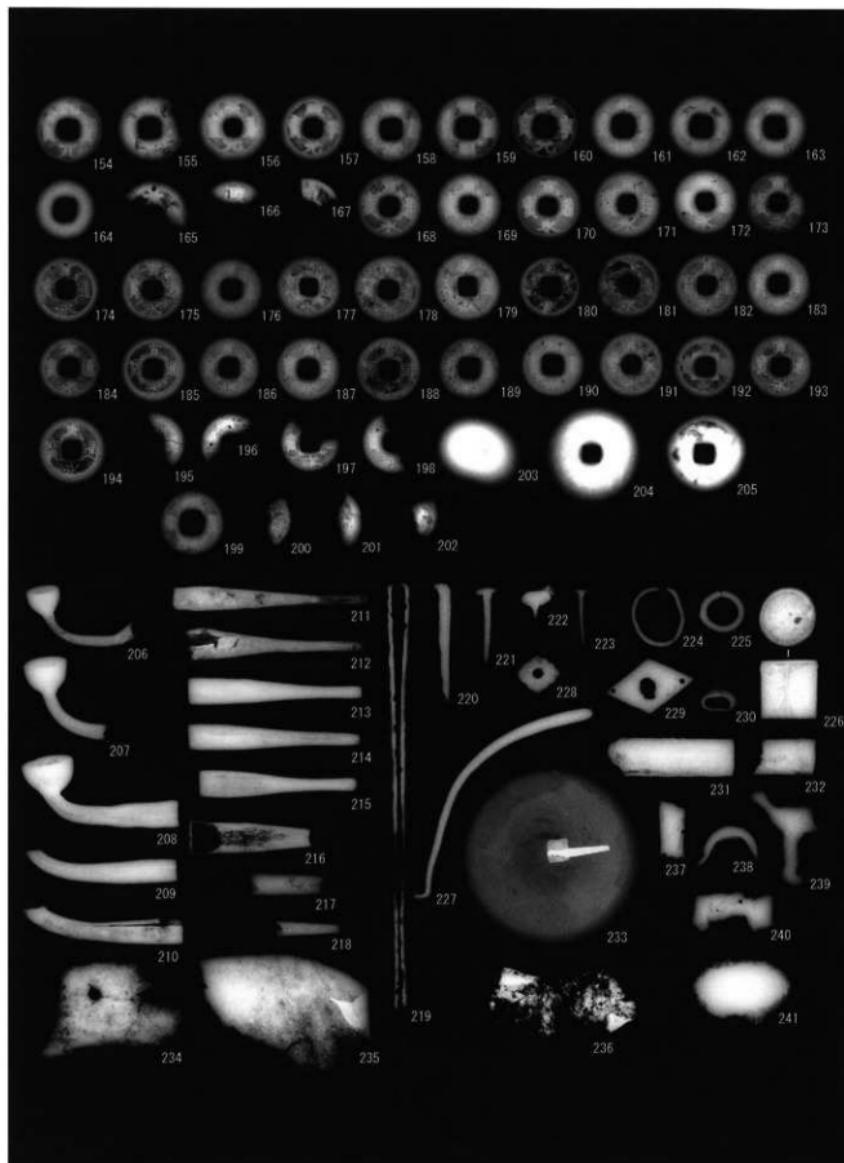


fig. 37 銅製品X線透視像(写真)

第3章 兵庫津遺跡から出土した動物遺存体

丸山真史（京都大学大学院人間・環境学研究科）

松井 章（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

1 概 要

本稿では、第42次調査で出土した動物遺存体の報告を行うとともに、そこから東へ100m余り離れた同じ兵庫津遺跡の第44次調査で出土した未報告の動物遺存体もあわせ、近世の兵庫津における動物利用について報告する。第42次調査では、動物遺存体が8点と骨角器が1点出土している。その内訳は、貝類が1点、魚類が4点、哺乳類が1点、不明が2点を数える。第44次調査では、動物遺存体が44点出土しており、その内訳は貝類が9点、魚類が2点、鳥類が1点、哺乳類が32点を数える。これらの動物遺存体は、中世から近代の遺構、あるいは遺物包含層から出土しており、そこが湿地状態にあったことから保存に恵まれたと考えられる。両調査ともに、フルイを用いた遺構土壤の水洗選別を行っておらず、発掘中に肉眼で確認したものに限られる。以下に、中世から近世の動物遺存体について報告する。

2 種類別の特徴

A 第42次調査出土の動物遺存体

a 貝類・魚類

アカニシ SD101から殻軸が1点出土している。

サメ類 遺物包含層（15世紀から江戸時代初頭）から、サメ類の椎骨が1点出土しており、椎体横径27.4mmを測る大型のサメ類である。

マダイ SD101から前頭骨が1点、主鰓蓋骨が1点（右）、計2点が出土している。前頭骨は正中方向に左右対称二つに切断されている。主鰓蓋骨は正中線と直交する方向に切断されている。整地層（18世紀～19世紀）から、切断痕が見られる外後頭骨1点（左）が出土している。現生骨格標本との比較では、いずれも体長30cm以上と推定される。

b 哺乳類

イノシシ/ブタ 15世紀から江戸時代初頭の遺物包含層から、肩甲骨1点（左）が出土しているが、野生種か家畜種かの区別はできない。

c 骨角器

櫛払い/ブラシ 第2層上面から、櫛払い（ブラシ）が1点出土している。櫛払いの植毛台の部分のみで、最大径2.8mm内外の穴が穿たれ、台裏には穴と穴の間に浅い溝が施される。この浅い溝は、植毛を縛って連結した紐の溝と考えられる。

B 第44次調査出土の動物遺存体

a 貝類・魚類

マガキ SK306から1点、第2層上層から1点、計2点が出土している。

アカガイ 焼けた土間からアカガイが1点、中央石列からフネガイ科が1点出土している。

アカニシ？ 南側砂層（盛土）からアカニシと思われる小片が1点出土しているが、種の同定には至らない。

フグ科 SD401からフグ科の歯骨（左）と角骨（右）が各1点、計2点出土している。現生骨格標本との比較では、いずれも体長40cmから50cm程度と推測される。

b 鳥類・哺乳類

キジ科 SX501から、脛足根骨が1点（右）出土している。

イヌ SK302から上腕骨3点（左1右2）、頭蓋骨（右）、下顎骨（左）、焼骨（左）、尺骨（左）、大腿骨（左）、脛骨（左）が各1点、計9点が出土している。SK401から脛骨1点（左？）が出土している。第3遺構面から脛骨1点（左）が出土している。躰集中部から寛骨（左）、大腿骨（左）、脛骨（左）が各1点、計3点が出土している。

イノシシ/ブタ SX501から、下顎骨が1点（左）出土している。犬歯が大きく発達しており、オスと考えられる。下顎体の大歯付近に叩き切った痕跡が見られる。

ニホンジカ SX501から椎骨、尺骨（左）、中手骨（右）、大腿骨（右）が各1点、計4点が出土している。SX502から、肩甲骨（左）が1点出土している。下層遺構面（第6面）から枝角、大腿骨（右）が各1点（右）、計2点が出土している。枝角は先端部が出土しており、軸方向に対して斜めに切断されている。第4遺構面から、脛骨が1点（右）出土している。第6遺構面から枝角（右）、大腿骨（左）が各1点、計2点が出土している。枝角は頭蓋骨から自然に脱落した落角であり、鋸によって切断されている。（中世包含層含む）から、中足骨1点（左右不明）が出土している。

イノシシ/ニホンジカ SX416とSX501から、それぞれ肋骨（左右不明）が1点ずつ出土している。

3 考 察

以前に報告した兵庫津遺跡の御崎本町地点から出土した動物遺存体は、解体痕や加工痕が見られる牛馬骨が主体であり、その地にそれらを加工して骨角器を作製した工房が存在していたと考えられる（丸山・松井2006）。それに対して今回の両溝査で出土した動物遺存体は、イヌやニホンジカが多く、御崎本町地点とは様相が異なる。ただし、発掘に際してフルイを用いていないことから、魚骨などの小型動物遺存体が見逃された可能性があり、本来、廃棄された量のごく一部に留まるだろう。出土したマガキやアカガイといった貝類、サメ類、マダイ、フグ科といった魚類、キジ科といった鳥類、イノシシあるいはブタ（以後イノシシと略記）、ニホンジカといった哺乳類は、いずれも食料の残滓と考えられる。これらは、西日本の近世遺跡から一般的に出土する種類ばかりである。イノシシは『続日本紀』に聖武天皇の天平4年7月「丁未詔 和賀畿内百姓私畜猪四十頭 放於山野 令遂性命」とあり、古代にブタを飼養していた可能性が指摘されている（加茂1976・鈴方1982）。また、長崎や広島でも市中でブタが飼われていたことが様々な史料から明らかで、史料から知り得ない地でもブタが飼育されていた可能性がある。出土した部位には、比較形態学的にイノシシとブタを区別できるものもなく、いずれとも決めることができない。

マダイは鋭い刃物によって切断されており、頭部も調理されたことを示す。前頭骨を左右真二つに切断した「兜割」は、潮汁やあら煮といった料理が想定される。主鰓蓋骨も切断されており、出汁の材料やあら煮として調理したのである。イノシシやニホンジカの出土は、狩猟や肉食を示唆する。ニホンジカの枝角、中手骨、中足骨は骨角器の素材として利用され、出土した枝角に鋸で切断した痕跡が見られる。イノシシの下顎骨は、犬歯を抜き取ろうとして犬歯の歯槽部に斧や鉈などによって叩き切られた痕跡が見られる。また、イノシシやニホンジカの毛、皮革、爪も武器や武具などの部品に用いられる骨角細工の素材となり、単に食用とされただけでなく、それ以外の生産に費やされたことが想定される。これらのほかにイヌも食料になった可能性があり、上腕骨1点には鋭利な刃物で切られた痕跡のほか、寛骨や大腿骨にも切断された痕跡が見られる。イヌは人間の食料となる以外に、鷹狩りのタカの餌としても利用される（金子1975）。

第44次調査では、ニホンジカは、町屋が区画される以前の17世紀前期のSX501およびSX502といった湿地状の落ち込みや、調査区の北半東に位置する下層造構から多く出土するが、17世紀中期になると出土量は減少する。一方、イヌは逆に17世紀前期に少なく、町屋が区画される17世紀中期のSK302とその周辺に集中して出土量が増加する。町屋が形成される以前には、調査区北部の湿地に解体したイノシシやニホンジカの残滓を廃棄し、町屋が建設された後は、調査区南部の町屋にともなうゴミ穴にイヌを解体して投棄している傾向が窺える。17世紀前期から中期にかけて、調査区北部に位置する湿地が埋められ、町屋の住民の食料残滓がゴミ穴に捨てられた結果、出土する動物遺存体に変化が見られると考えたい。第42次調査では出土量が少ないが、18世紀には背中合わせの町屋の間に掘られた溝に、魚骨や貝殻などの日常生活で生じた食料残滓が廃棄されている。このようにゴミは土坑、溝、自然の落ち込みなど様々な場所に廃棄されるが、イノシシやニホンジカといった大型動物と、魚貝類やイヌなどの小中型動物とが、分別して廃棄されたことが想定される。

4 まとめ

今回、兵庫津遺跡から出土した動物遺存体の多くは、人間の食料として消費された残滓と考えられる。瀬戸内海に面した兵庫津で魚骨の出土は少數に留まるが、発掘中に肉眼で確認できたものだけが採集されたためであろう。近世の都市でも、狩猟によって獲られたニホンジカや家畜であったイヌも、人間の食料となっていたことがわかる。ニホンジカの角に見られる加工痕から、発掘地付近で骨角器が製作されていたと考えられる。都市の成長と土地利用の変化にともない、大型の哺乳類と魚類と小中型の動物の遺体が分別廃棄されていた可能性がある。

参考文献

- 鶴方貞亮 1982「改定日本古代家畜史」pp. 451-526
 金子浩昌 1975「葛西城址Ⅳ・V区出土の動物遺体」「青戸・葛西城址調査報告Ⅲ」葛飾区・葛西城址調査会 pp. 197-263
 加茂義一 1976「日本畜産史」食肉・乳酪篇 法政大学出版 pp. 123-124
 丸山真史・松井 章 2006「兵庫津遺跡（御崎木町地点）出土の脊椎動物遺存体」『兵庫津遺跡』大手前大学史学研究所 pp. 195-209

表1 種名表

軟体動物門 Mollusca	
腹足綱 Gastropoda	
アッキガイ科 Muricidae	
アカニシ? Rapana venosa	
斧足綱 Bivalvia	
フネガイ目 Arcoida	
フネガイ科 Arcidae	
アカガイ Sepharaca broughtonii	
フネガイ科の一種 Arcidae gen. et sp. indet.	
カキ目 Ostreoidae	
イタボガキ科 Ostreidae	
マガキ Crassostrea gigas	
脊椎動物門 Vertebrata	
軟骨魚綱 Chondrichthyes	
板鰓亜綱の一種 Elasmobranchii, order, fam., gen. et sp. indet.	
硬骨魚綱 Osteichthyes	
スズキ目 Percidae	
	タイ科 Sparidae
	マダイ Pagrus major
	フグ目 Tetraodontiformes
	フグ科 Tetraodontidae
	フグ科の一種 Tetraodontidae gen. et sp. indet.
	鳥綱 Aves
	キジ目 Galliformes
	キジ科 Phasianidae
	哺乳綱 Mammalia
	食肉目 Carnivora
	イヌ科 Canidae
	イヌ canis familiaris
	偶蹄目 Artiodactyla
	イノシシ科 Suidae
	イノシシ Sus scrofa
	シカ科 Cervidae
	ニホンジカ Cervus nippon

表2 動物遺存体一覧表

単位:mm

通番	調査	日付	地 区	遺 構	時 期	大 分 類	小 分 類	部 位	部 分	左 右	備 考
1	42次	130-1	1区中央	—	15c ~江戸初期	哺乳類	イノシシ	肩甲骨	骨幹部~遠位端	左	GLP41, SSLC33.0
2	42次	130-2	1区中央	—	15c ~江戸初期	吸骨魚綱	ナメ鰐	椎骨	椎体	—	椎体横径28.4
3	42次	122	1区	SP505	17末 ~18初	鳥類/哺乳類	不明	浜枝骨?	翼片	—	小型哺乳類?
4	42次	090	—	出土品	18c ~明治	哺乳類?	不明	不明	翼片	—	—
5	42次	089	—	豊塚層	18~19c	吸骨魚綱	マダラ	外側頭骨など	—	左	切断
6	42次	060	—	豊塚層(第2回)上層	18~19c	骨角器	ウシ/ウマ?	四肢骨	—	—	脚払い/ブラシ
7	42次	015	2区	SD101南斜	江戸後期(18~19c)	吸骨魚綱	マダラ	主縦脊骨	下位部	右	切断
8	42次	043	2区	SD101-2区	江戸後期(18~19c)	吸骨魚綱	マダラ	前頭骨	右側	—	切断(先制)
9	42次	016	—	SD101最下層	江戸後期(18~19c)	鹿足骨	アカニシ	股骨	—	—	—
10	44次	076	南北東トレンチ	中盤氷合沖合む	中盤~17c 中	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	骨幹部	—	—
11	44次	210	北半東	SN501南	17c 前	鳥類	キジ科	尾翼骨	骨幹部~遠位端	右	Bd10.5
12	44次	199	北半東	下羽遺跡第6面?	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	枝角	先端部	—	骨角器? 切断面確認? 前端付近5mmに傷
13	44次	199	北半東	下羽遺跡第6面?	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	大顎骨	近位部~骨幹部	右	—
14	44次	204	北半東	第6面(※5面)	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	大顎骨	遠位部	左	—
15	44次	208	北半東	第6面(※5面)	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	枝角	角座~第1枝角	右	鳥歯・歯切跡
16	44次	210	北半東	SN501南	17c 前	哺乳類	イノシシ	下顎骨	左	オス、母仔	—
17	44次	210	北半東	SN501南	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	大顎骨	骨幹部~遠位端	右	Bd48.4
18	44次	210	北半東	SN501南	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	—	—
19	44次	210	北半東	SN501南	17c 前	哺乳類	不明	不明	破片	—	—
20	44次	213	北半東	SN502	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	翼手骨	骨幹部~遠位端	左	SLC21.9
21	44次	216	北半東	SN501	17c 前	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	骨幹部	—	—
22	44次	216	北半東	SN501	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	尺骨	近位部~骨幹部	左	—
23	44次	216	北半東	SN501	17c 前	哺乳類	ニホンジカ	手骨	近位部~骨幹部	右	Bg28.3
24	44次	198	北半東	SD401	17c 前~中	吸骨魚綱	ワグチ科	角骨	頭部付近	右	—
25	44次	198	北半東	SD401	17c 前~中	吸骨魚綱	ワグチ科	齒骨	ほぼ完形	左	—
26	44次	113	南北北船	第4面検出中	17c 前~中	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	骨幹部	右	—
27	44次	117	南北北船	第4面検出中	17c 前~中	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	骨幹部	—	—
28	44次	131	南半	SK401	17c 前~中	哺乳類	イス	脛骨	骨幹部	左?	—
29	44次	136	南半	SK416	17c 前~中	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	骨幹部	—	—
30	44次	201	北半西	SK306	17c 中	新足綱	マガキ	體体	—	右	—
31	44次	078-1	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	下頬骨	下顎体	左	M3歯印
32	44次	078-2	南半	SK302	17c 中	鹿足綱/新足綱	不明	體体	翼片	—	—
33	44次	069	南半	第3面検出中	17c 中	哺乳類	イス	腰骨	骨幹部~遠位端	右	Bd22.5
34	44次	082	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	腰骨	腰骨	右	未収合・幼健
35	44次	082	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	腰骨	骨幹部~遠位端	右	Bd22.9
36	44次	084	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	上腕骨	ほぼ完形	左	Bg26, IDp10.0
37	44次	084	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	上腕骨	骨幹部~遠位端	右	Hd33.3
38	44次	084	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	上腕骨	近位端~骨幹部	右	Bg31, IDp36.1
39	44次	084	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	脛骨	近位端~骨幹部	左	Bg29.7
40	44次	084	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	尺骨	近位端~骨幹部	左	DPA14.3SD021.8
41	44次	084	南半	SK302	17c 中	哺乳類	イス	大顎骨	近位端~遠位端	左	Bd31.9
42	44次	171	南半	腰輪中部	17c 中	哺乳類	イス	大顎骨	近位端~骨幹部	左	近位端切削?
43	44次	171	南半	腰輪中部	17c 中	哺乳類	イス	寛骨	寛骨臼~脛骨	左	切断
44	44次	171	南半	腰輪中部	17c 中	哺乳類	イス	脛骨	近位端~骨幹部	左	—
45	44次	177	南半	南東朝鮮石	17c 中	哺乳類	不明	不明	穢片	—	—
46	44次	152	北半東	第2面土上層	17c 来	新足綱	マガキ	體体	—	左	—
47	44次	178	北半東	中央右列検出中	17c 来?	新足綱	ワニガイ科	體体	破片	—	—
48	44次	035	南半	第1面高庭土	17c 来~18c 初	新足綱	カカニシ?	體体	穢片	—	—
49	44次	031	南半	第1面	18c 来	新足綱	カカニシ	體体	—	左	—
50	44次	006	—	—	—	新足綱	ハマグリ	體体	—	右	—
51	44次	006	—	—	—	新足綱	ハマグリ	體体	—	右	—
52	44次	002	—	—	—	近代	複足綱/新足綱	不明	穢片	—	—
53	44次	149	北半東	複足4	—	哺乳類	イノシシ	裏脛角?	下顎切歎?	—	胸張部?

出典はDenech (1976) に準じた

第4章　まとめ

第1節　兵庫津遺跡第42次調査地の変遷

今回の調査では、中世から近代に至る7面の遺構面を確認した。ここでは調査成果から、調査地の変遷をみてみたい。

第7遺構面

第7遺構面からは上として、15~16世紀の遺物を伴う大型円形土坑や、不定形な落ち込み多数を検出した。多量の瓦が出土した事から、付近に建物の存在が推定されるが、その出土状況は廃棄を想定させるものである。瓦の時期は概ね15世紀代と考えられ、鬼瓦を作うことから大規模な建物の存在が窺われる。近隣地では本調査地北西側に近接する第13次調査で、15世紀を中心とする14世紀~16世紀の遺構、遺物が検出され、14世紀の丹波焼埋甕遺構、15世紀の方形基壇状遺構が検出されている。また、「兵庫北四入船納帳」(文安2年〔1445〕)の地下船頭脣書地名に、調査地付近の鹿屋町に対応すると考えられる「□(亥)辻子」が見られる事から、調査地付近では、15世紀半ばにはすでに町屋が形成されていたことが推定されるが、屋敷地割は確認されなかった。

第6遺構面

第6遺構面は整地と、錯綜する遺構の切り合いで生活面としての検出はできなかつた。SX602からは17世紀後半代と考えられる遺物が出土している。SX602石組の主軸は、やや北に振る東西方向ではあるが、第6遺構面についても、屋敷地割は確認できない。

第5遺構面

第5遺構面は上面を火災層に覆われている。これ以降は、ほぼ同じ屋敷地割で町屋が形成されている。17世紀後半~18世紀の遺物が出土しており、この時期には1区および2、3区の東半が、東西主軸の短冊型屋敷地割の町屋で、西半は円形や不定形の土坑が複雑に切り合った状況から、町屋背後の空地における魔除坑とも考えられる。

第4遺構面

1区でのみ検出された。第5遺構面を覆う炭層上面を整地して、町屋を形成している。

第3遺構面

第3遺構面も火災層に覆われる。SB301等の遺構面は固く焼締まり、火勢の強い火災であった事が窺われる。第5遺構面の火災層も含め、火災規模と出土遺物の時期、第5遺構面及び第3遺構面出土の寛永通寶に、元文4年(1739)以降鑄造の鉄錢が含まれない点から、両者の内どちらかが宝永5年(1708)の大火に伴う可能性がある。また、時期的には貞享年間(1684~1688)の大火も記録されているが、町場では火災がしばしば発生したとされ、個別の火災の存在も予測されるため、慎重な検証が必要である。

第2遺構面

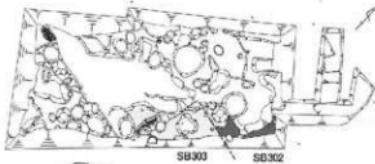
第2遺構面は第3遺構面を覆う火災層の上面に形成されている。火災層には建築部材などの焼け残りの資材などが確認できないため、第3遺構面の火災層火後に整地が行なわれ、その後、第2遺構面が形成されたものと推定される。町屋は検出されなかった。

第1遺構面

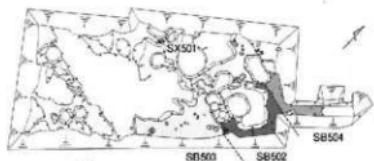
第1遺構面では西側に右積を有する掘削状の溝から、多量の遺物を検出した。多くは18世紀~19世紀にかけてのものであるが、特筆されるものとしてベトナム陶器と考えられる壺の破片が出土した。これは焼締長胴壺(切溜)に類似する。ベトナム陶器焼締長胴壺は「南蛮切溜花入」と呼称されて華道で使用され、伝世品も多いものである。江戸、京、堺環濠都市遺跡、大坂城下、博多、長崎等の安土桃山~江戸時代前期の都市遺跡からの出土例が報告されており港湾都市として栄えた兵庫津を反映するものである。また、多種多様の遺物の出土から、町場における生活の多様性、物資の流通が窺われる。



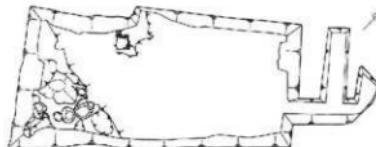
第6・7遺構面（15世紀～17世紀）



第3遺構面（17世紀後半～18世紀半）



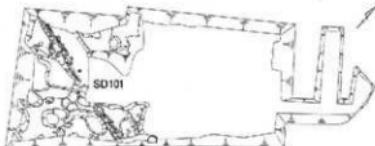
第5遺構面（17世紀後半～18世紀前半）



第2遺構面（18世紀～19世紀）



第4遺構面（17世紀後半～18世紀前半）



第1遺構面（19世紀）

0 10m

網掛範囲施肥

fig. 38 第42次調査地の変遷

第2節 元禄期の兵庫津復元と第42次調査地

現存する兵庫津最古の絵図である、「攝州八部郡福原庄兵庫津絵図」(元禄9年〔1696〕)（以下元禄絵図）から元禄期の兵庫津の様子は知られていたが、近年の発掘調査成果から、その正確さが実証されつつある。これまでの調査成果から、元禄期の兵庫津復元を試みたい。

元禄絵図 との対比

近代に入ってからの兵庫津一帯の詳細な地図に明治16年（1884）内務省地理局作成の「神戸兵庫実測圖」がある。「元禄絵図」および現在の街路と対比すると、道路の拡幅等は考えられるものの、「元禄絵図」の町割が明治16年の段階では良好に残されている状況が確認できる。兵庫津遺跡の発掘調査では、平成13年度に実施した須佐野通での第26次調査で真光寺旧境内地を巡る濠の北東角、その北側の須佐之入江に注ぐ河道の一部、東西方向の道路（fig. 39A）を検出した。平成14年度には櫛原惣門跡の発掘調査（第29次）が実施され、惣門の一部、その外側の濠が検出された（fig. 39B）、さらに平成8年度の兵庫県教育委員会の調査における入江町の船入江に伴う石垣の一部の検出（fig. 39C）、平成15年度の第35次調査の兵庫勤番所（兵庫城）に伴うものと考えられる石垣の検出（fig. 39D）と東出町、西出町等で良好に現在の街路に残される「元禄絵図」当時のものと考えられる町割などを元に、現在の地形図へ明治16年の街路を投影させ、復元を行なったものがfig. 39である。この作業の中で、兵庫津外の周辺部に明治16年当時の道路が現在も残されている箇所（E、Fなど）があり、周辺地の復元の助けとなつた。

調査地の位置

この復元図から、調査地周辺の復元を行なうと（fig. 40）、調査地は、湊口惣門から兵庫津中を札場の辻へと南下する西国街道の1本西側の南北方向の道路（調査区東に現存）西側に面しており、「長福寺町」と「鹿屋町」の境付近に位置するものと推定される。このことから第1道構面で検出したSD101は町境を流れる排水路的な機能を持った溝である可能性が考えられる。検出した町屋群はこの南北の道と調査区北東の交差点から、3区北部に存在したであろう永沢口へ向かう東西方向の道（擾乱により消滅か）に面し、直交する細長い短冊型の区画の町屋が並んでいたもの内、南北道路に面する範囲と考えられる。3区SX501出土上の「坤」（fig. 15-45）及びfig. 16-47の「巽」墨書き上器は、出土地点から南北方向の建物の地鎮に伴うものと考えられ、後世の擾乱と調査範囲から、確認できなかつたが、3区北半には水沢口に向かう東西方向の道路に面する南北主軸の町屋などの建物の存在を示唆するものである。調査区の北西には東西道路から長福寺へ向かう南北の道が分岐、その道の西側には法界寺、調査区の南西には西平寺が所在する寺院と町屋が混在する一帯であったと考えられる。

屋敷地割

調査地は「元禄絵図」ではすでに建物が描かれ、調査地の周辺にも建物が建ち並んでいる状況が描かれている。これにより、「元禄絵図」の作成された17世紀末の段階では、町屋が形成されていることが確認できる。今回の調査地での屋敷地割については、17世紀後半以降にその変遷を辿ることができる。本調査地の北東の七宮町2丁目に位置する第14次調査（旧第15次、元禄期には宮前町に相当。）及び、第20次調査（元禄期には北宮内町に相当。）においては、16世紀末～17世紀前半にかけて、17世紀半ば以降へ継続する町屋の成立が指摘されているが、本調査区では、16世紀代の遺物の出土は確認され

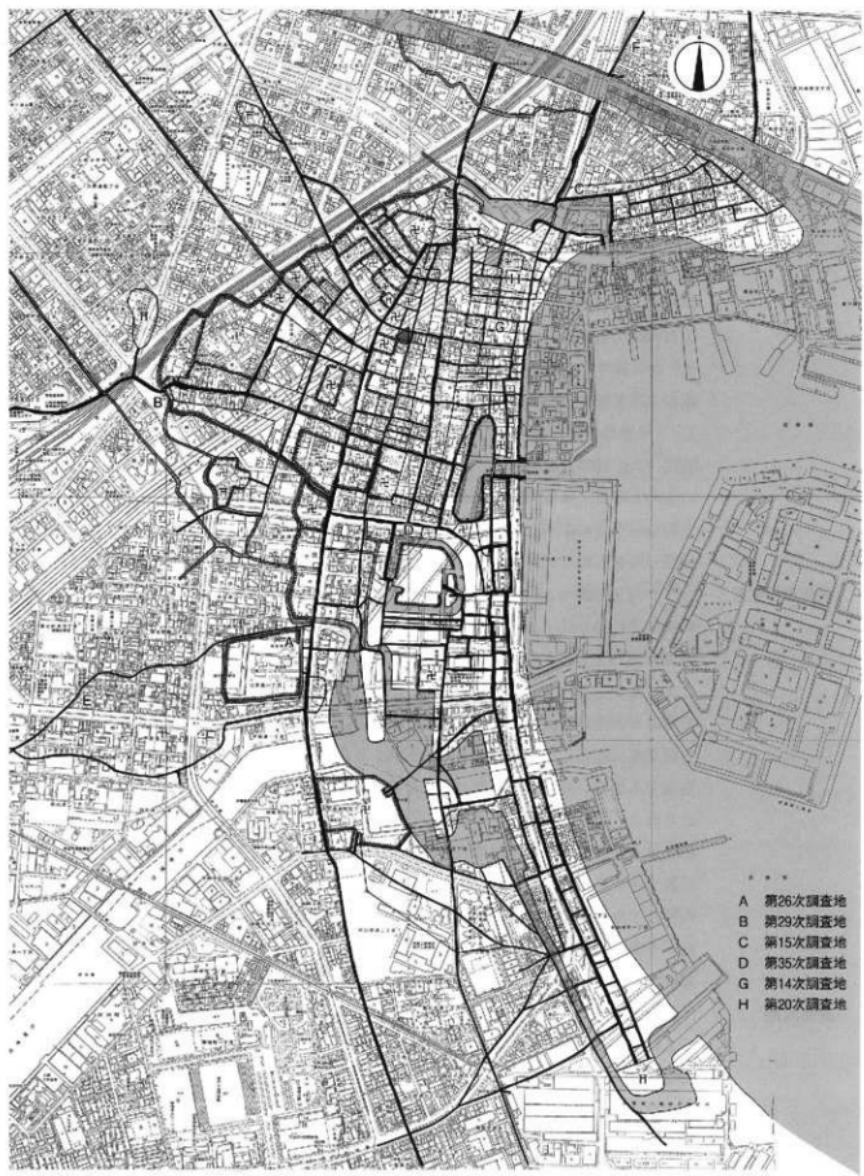


fig. 39 元禄期兵庫津復元図 ($S = 1 : 10,000$)

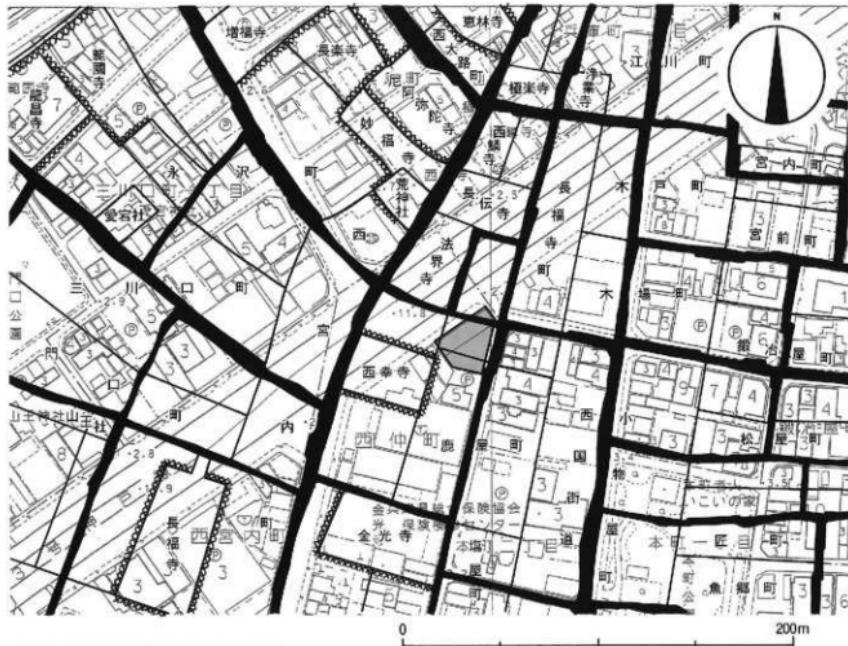


fig. 40 調査地周辺復元図 (S=1:2,500)

るもの、その成立については、確認することができなかった。また、「元禄絵図」に相当する遺構面の特定は、遺構に伴う出土遺物が少ないとから、困難ではあるが、SX 501出土遺物 (fig. 15) や、焼土及び整地層内出土の銭貨 (fig. 36) の時期から、現状では第5遺構面が、「元禄絵図」の時期に相当する可能性が高い点を指摘しておく。

屋敷地割については、後世の搅乱の影響を大きく受けたことと、調査範囲から、町屋及び屋敷地の全体を検出できなかったため、詳細については不明である。しかし、第5遺構面ではSB502と503の南北幅から、第3遺構面ではSB301～303の南北幅から間口は5m前後に復元される。東西の奥行は第5遺構面では定かではないが、第3遺構面ではSB301、303の西側の落ち込みへのラインに差異がみられることから、地割の東西の奥行には長短があることが窺われる。第14次調査では、屋敷地割を示した現存する「水帳絵図」と合致し、地割の奥行に長短があることが、発掘調査成果と絵図の両方で確認されている。また屋敷地割については、北浜では町屋の平均的な屋敷地割は、間口3間（約5.4m）、奥行6間半（約10.8m）程とされるが、調査区付近の岡方では多彩な形状が確認されるとの指摘があり。¹⁷⁾今後の本調査地付近の調査の進展により、その屋敷地割の遺構が明らかとされよう。

今後の課題

兵庫津は、絵画資料や文献が数多く現存しており、多方面からの総合的な検証が可能な稀有な地域である。しかし、兵庫津遺跡の発掘調査成果と他分野との総合的な検討は、一部を除いて、未だ進展しているとは言えないのが現状である。

近世以前の兵庫津遺跡の状況については、一部で遺構・遺物が検出されているが、全体的な様相については、不明な点が多い。しかし、今回の調査では、遺構の完掘については、実施することができなかったものの、15世紀代の鬼瓦を含む多量の瓦を始めとする、多くの遺物の出土が確認された。調査区の北西側に近接する第11・13次調査においても、15世紀を中心として、14～16世紀に至る遺構・遺物が確認されていることから、調査区周辺に中世段階における、濃密な遺構・遺物の分布が推測される。また鬼瓦の存在や、多数の瓦の出土から、大規模な建物の存在が考えられる。

近世については、後世の擾乱の影響から、限られた範囲での遺構の確認であったが、2面の火災面と3面の町屋遺構の検出、第1遺構面からの駆状遺構の検出とベトナム陶磁の出土など、その成果には大きなものがあった。しかし、町屋の規模については全体規模を確認することはできず、調査区北半での東西道路の存在と、これに面するであろう南北主軸の町屋については、明らかにすることはできなかった。

今回は「元禄絵図」から現在の地形図へ、元禄期の兵庫津を投影する復元を試みた。兵庫津には「元禄絵図」以降にも、「揖津国矢田部郡福原庄兵庫地図」(宝曆元年〔1751〕)、「兵庫津絵図」(明和6年〔1769〕)、「津中絵図控」(嘉永3年〔1850〕)などの絵図が現存しており、時代の変遷と共に、市街地が周辺部へと拡大していく状況が確認できる。これまでの発掘調査成果においても、「元禄絵図」で町場ではない範囲から、元禄期以降の遺構・遺物の確認がされている。今後、兵庫津全体の復元が進展することにより、その変遷過程の検証についても可能となる。今回の復元案は今後の調査の進展により、修正が必要なものであり、まずは兵庫津復元に向けた一案としたい。

第3節 おわりに

今回の調査では、兵庫津の中心部における町場の変遷の一端を確認することができた。しかし、兵庫津の検証はごく一部であり、全体復元には未だ遠い状況にある。今後の調査の進展と総合的な検証から、瀬戸内海航路有数の港湾都市として栄えた兵庫津の復元に向けて、ひとつひとつの調査データの積み重ねが重要である。その点から、今回の調査は町場内の変遷の貴重なデータを提供したものといえよう。

第2・4章註

- 1) 法隆寺昭和資料叢書編集委員会編『昭和資料帳15 法隆寺の至宝 瓦』小学館 1992
- 2) 大手前大学本多史子氏、大手前大学大学院赤松和桂氏より、これに類似する鉢鉢は北部九州から北陸に多く見られるとのご教示を得た。記して深謝を申し上げます。山口県須佐唐津窯跡の陶器鉢鉢は、山口県萩市萩城跡などで出土例がある。
谷口哲一他「萩城跡（外堀地区）」財團法人山口県教育財團 山口県埋蔵文化財センター 2002など
- 3) 黒田恭正氏よりご教示を得た。また黒田氏から今河出土の中、近世遺物の観察に、多大なご教示を得た。記して深謝を申し上げます。
- 4) 長谷川賛編『伊丹郷発掘調査報告書』兵庫県教育委員会、1993
山下史郎編『明石城武家屋敷』兵庫県教育委員会 1992
中原周一「防長地域の近世陶磁器の動向」『研究紀要』第7号 下関市立考古博物館 2003
萩焼の防長地域以外への拡散は18世紀後半以降とされる。本例は他の出土遺物と違い焼けておらず、上層からの混入品と考えられる。
- 5) 平安京左京二条四坊十一町（京都市中京区柳馬場竹屋通下ル）
能芝 勉「京都市内出土の東南アジア陶磁について一柳馬場竹屋町出土のベトナム陶磁を中心に一」
『研究紀要 第4号』財團法人 京都市埋蔵文化財研究所 1998
- 6) 国田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津遺跡II』兵庫県教育委員会 2004
- 7) 武藤 寛「中世の兵庫津と瀬戸内海水運 一入船納帳の船積量比定に関する」
『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版社1981
- 8) 黒田恭正「兵庫津遺跡 第20次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
第20次調査において黒田恭正氏は、宝永大火時の町屋及びその直下で検出された、第20次第3・4造構面出土銭貨に、元禄10年（1697）以降鋳造の新寛永通寶を含み、元文4年（1739）以降鋳造の寛永通寶銭を含まない点が、第3造構面を覆う焼上層の年代を宝永5年（1708）とすることと抵触しない点を指摘している。第42次調査では第7造構面遺物包含層出土寛永通寶に、新寛永通寶が1点あるが、出土状況から上層から混入の可能性が高い。第5・3造構面焼土層及び造構出土寛永通寶については、第20次出土銭貨と同じ様相が考えられる。
- 9) 前掲5)
- 10) 阿部敬生・阿部 功「兵庫津遺跡 第26次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004
- 11) 須藤 宏「兵庫津遺跡 第29次調査」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
- 12) 水口富夫・深江英憲「七宮地区」『兵庫津遺跡II』兵庫県教育委員会 2004
- 13) 内藤俊哉「兵庫津遺跡 第35次発掘調査概要一」神戸市教育委員会 2006
- 14) 内藤俊哉「兵庫津遺跡 第15次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- 15) 前掲8)
- 16) 萩本史子「兵庫津の空間復元—御崎本町地点を中心として—」『兵庫津遺跡—御崎本町地点発掘調査報告書』大手前大学史学研究所 2006
- 17) 高久智広「江戸時代の港湾都市・兵庫津の都市空間を読む」『特別展よみがえる兵庫津・港湾都市の命脈をたどる』神戸市立博物館 2004
同方には「地方十八町」など農民が多く生活し、農村的な景観も点在する一方で、商人や、木陣、關本陣が置かれて、旅宿が軒を連ねるなど、様々な人々が集住する地域であったと考えられている。

引用・参考文献

- 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995
- 佐野 元・河合君近編『財団法人 滋賀市埋蔵文化財センター研究紀要 第5輯』財団法人滋賀市埋蔵文化財センター 1997
- 長谷川 哲「丹波」中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 資料集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 2005
- 柴岡 実「近世備前焼鉢の編年」「岡山城二之曲輪跡 表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査」岡山市教育委員会 2002
- 長谷川 眞「近世丹波燒の生産と流通」近世丹波焼の研究 大手前大学オープン・リサーチ・センター 2007
- 鶴谷和彦「堺鉢の生産と流布」『月刊考古学ジャーナル』No.409 ニューサイエンス社 1996
- 山下俊郎「明石陶器」『歴史と神戸』第37巻第5号 神戸史学会 1998
- 財団法人姫路市文化振興財團埋蔵文化財センター編『江戸時代のやきもの－牛窓と流通－ 記念講演会・シンポジウム資料集』財団法人姫路市文化振興財團埋蔵文化財センター 2006
- 九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会 2000
- 鈴木公雄「六道線に見る江戸時代の絹貨流通」「八百八町の考古学』山川出版社 1991
- 古家 弘「江戸を掘る－近世都市考古学への招待－」柏書房 1983
- 藤井太郎「兵庫津沿線における埋蔵文化財調査の現状－発掘調査の成果と文献・絵画資料から考える近世都市景観の復元に向けて－」『神戸市立博物館研究紀要 第18号』神戸市立博物館 2002
- 高久智広「近世期兵庫津北浜における浜先地開発と屋敷割の変化について」『神戸市立博物館研究紀要』神戸市立博物館 2002
- 藤井太郎編『兵庫津遺跡第36次発掘調査概要』神戸市教育委員会 2006
- 三中一廣『兵庫津38』兵庫津遺跡38次調査会 2006
- 歴史資料ネットワーク編『歴史のなかの神戸と平家 地域再生へのメッセージ』神戸新聞出版センター 1999
- 兵庫・岡山・広島三県合同企画展実行委員会編『津々浦々をめぐる 中世瀬戸内海の流通と交流－』
- 兵庫・岡山・広島三県合同企画展実行委員会 2004
- 新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史 総史編III 近世』神戸市 1992
- 兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史』第2巻 兵庫県 1975
- 兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史 史料編 古代2』兵庫県 1985

写 真 図 版

図版 1



1区第6・7遺構面空中写真（東から）



1区第6・7遺構面全景（西から）



2区第6・7遺構面全景（東から）



SK710 (北東から)



SX602石組 (南東から)



3区第6・7遺構面全景 (南から)



SX708鬼瓦出土状況 (東から)

図版 3



3区第5遺構面空中写真（南西から）



1区第5遺構面全景（西から）



3区第5遺構面全景（南から）



SX501 (北から)



1区第4遺構面全景 (西から)



1・2区第3遺構面空中写真 (東から)



3区第3遺構面空中写真 (南西から)

図版 5



1区第3遺構面全景（南西から）



2区第3遺構面全景（東から）



3区第3遺構面全景（南から）



1区第2遺構面全景（南西から）



2区第2遺構面全景（東から）



SK201（西から）

図版7



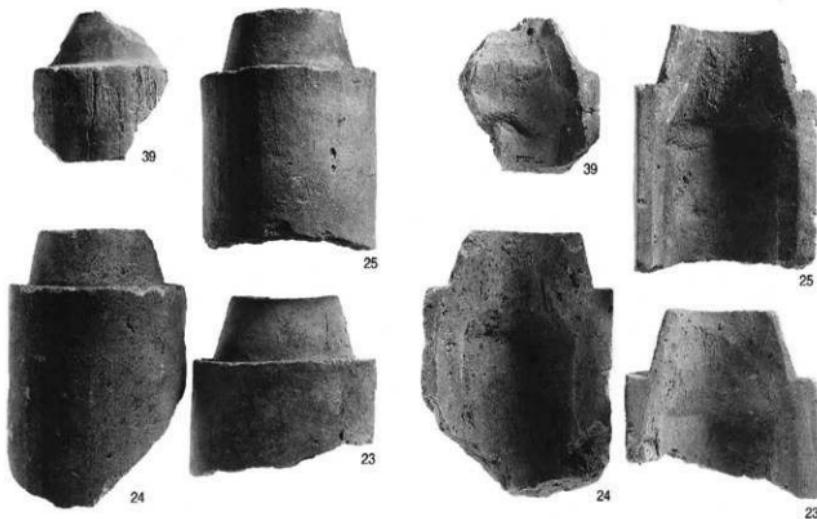
1・2区第1遺構面空中写真（東から）



2区第1遺構面全景（東から）

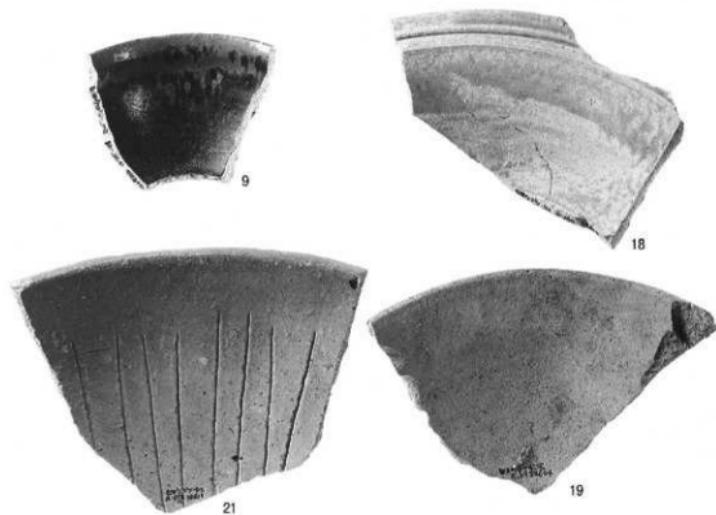
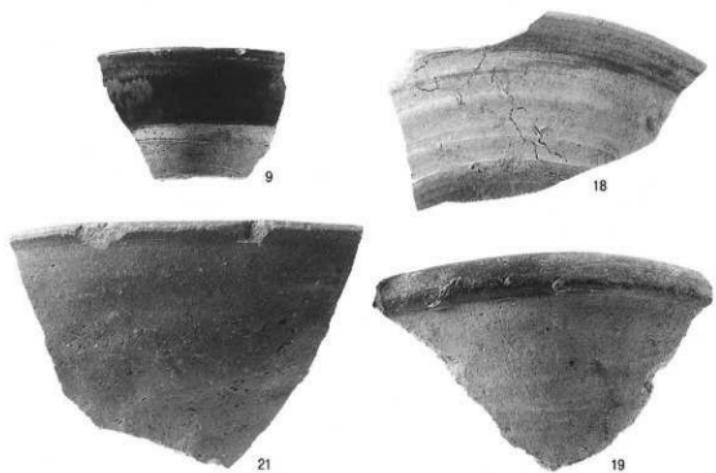


SD101西側石積（東から）



第6・7造構面出土遺物（1）

図版 9



第6・7遺構面出土遺物（2）



26



26

SX708出土鬼瓦



27



27



28



31



31

SX602出土遺物

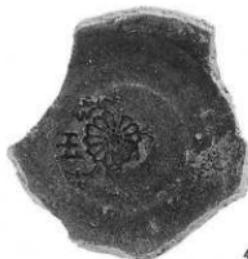


第6・7遺構面出土遺物（3）

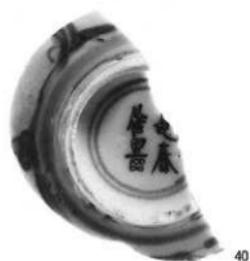
図版11



40



41



40



41



44



42



43



44

SB503・504出土遺物



45



47



45



47

遺構に伴わない遺物



46



49



50

46 SB401出土遺物



52



52

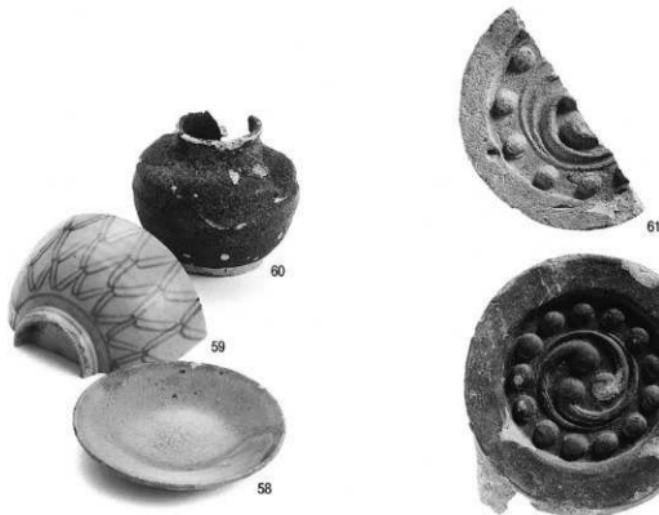
SX501出土遺物



56

SX401出土遺物

图版13

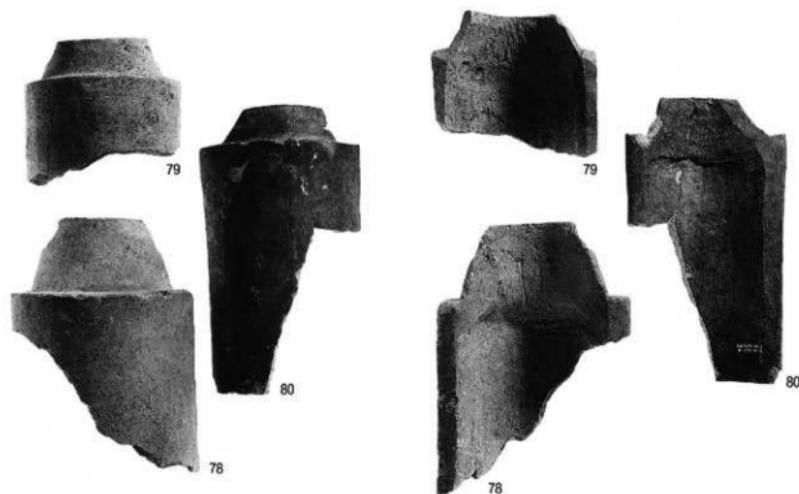


SB301 · 303出土遺物



燒土層出土遺物

SK201出土遺物



SK201・202出土遺物



SK203出土遺物



SK207出土遺物



89

図版15



SD101出土遺物（1）



121



124



122



124



127



126



123

SD101出土遺物（2）

図版17



125



133



128

SD101出土遺物（3）



132



131



130



129



134



135

第1造構面出土遺物



土製品



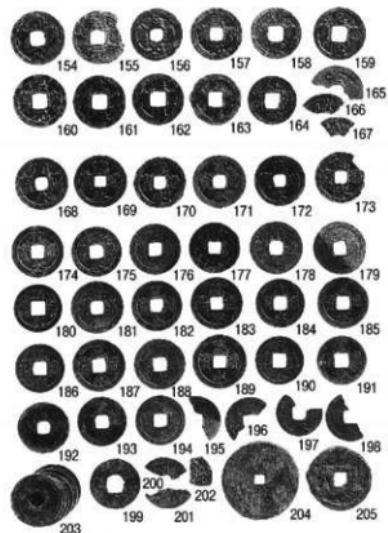
石製品

漁具

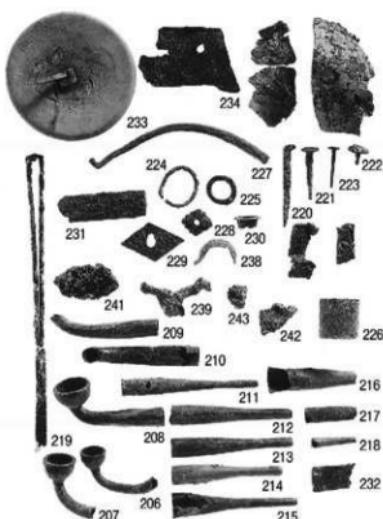
図版19



鉄製品



銅錢



銅製品



- 1 イノシシ肩甲骨（左） 2 サメ類椎骨 6 骨角器 7 マダイ主鰓蓋骨（右） 8 マダイ前頭骨 11 キジ科胫足根骨（右）
 12 ニホンジカ枝角 13 ニホンジカ大脛骨（右） 15 ニホンジカ枝角（右） 16 イノシシ下顎骨
 17 ニホンジカ大脛骨（右） 22 ニホンジカ尺骨（左） 23 ニホンジカ中手骨（右） 25 フグ科歯骨（左） 31 イヌ下顎骨（左）
 33 イヌ脛骨（左） 35 イヌ椎骨（左） 36 イヌ上腕骨（左） 39 イヌ脛骨（左） 40 イヌ尺骨（左） 41 イヌ大脛骨（左）
 43 イヌ寛骨（左） 46 マガキ（左） 49 アカガイ（左） 51 ハマグリ（右）

*番号は表2動物遺存体一覧表の通番に対応する

出土動物遺存体

報告書抄録

ふりがな	ひょうごついせきだい42じはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書					
副書名	—神戸市兵庫区西仲町における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—					
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	阿部 功(編) 丸山真史 松井 章					
編集機関	神戸市教育委員会					
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 Tel 078-322-6480					
発行年月日	西暦2008年3月31日					
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査原因
		市町村	遺跡番号			
兵庫津遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区西仲町445	28103	24	34度 40分 14秒	135度 10分 24秒	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
兵庫津遺跡	集落跡	中世 江戸時代～明治時代	町屋 溝 土坑	須恵器・土師器 瓦器・陶磁器 瓦・金属製品		

兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書

—神戸市兵庫区西仲町における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2008.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課

〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷 水山産業株式会社

〒653-0012 神戸市長田区二番町3丁目4番1号
TEL 078-577-3757